

第 8 章

農村開発における在村リーダーシップと インフラ整備事業の可能性

— バングラデシュ・ドッキンチャムリア村の事例 —

安藤 和雄

はじめに — 農村開発に対する問題意識 —

「アッラーフ、アクバル」、モスジットから流れるアザンのマイクの声と、電気モーターが汲みあげる乾季稲作への浅井戸灌漑の音が、夜明け前の村の静寂のなかに響く。白んだ村に、クウーエ、クゥウ、クゥウ、クゥウ、鳥の声がこだまする。日が昇れば、ジージージジと響く緑色の体色をしたセミの声と、カットン、カットン、カットン、カットンと機を織る音が耳を楽しませてくれる。これらの音に、機織りの家内工場から、最大にボリュームをあげたラジカセの音楽が流れる。1年3カ月ぶりに、バングラデシュ、タンガイル県(district)に位置するドッキンチャムリア村(以下、D村)を訪れ、この原稿を書きながら、村が奏でる音を楽しんでいる。

バングラデシュの村で多少なりとも「生活した実感」がある者にとって、村の存在は自明である。村には、笑い、泣き、怒り、叫ぶ、人の暮らしがあり、風景や自然、色、音、匂いがある。五感がとらえた、消しざることができない実体がある。1992年～95年の間、国際協力事業団(JICA)の研究協力

事業「農村開発実験」の一環として⁽¹⁾、D村において、新たな農村開発の手法が模索されはじめたとき、すでにD村をはじめ、バングラデシュの数カ村での生活体験をもっていた私は、五感がとらえた村の実体を大切にしたいと思っていた。そしてD村の同僚たちとともに「村で暮らす人々は、村で暮らすことに自信と誇りがもて、村の外からかかわる人々は、村に学ぶ喜びを知る事業」が私たちの農村開発であってほしかった。このような個人的な問題意識とは別に、持続的発展や人々の参加という開発のパラダイムが、私たちの農村開発の手法においても、追求された。

具体的には、D村では、在村のリーダーたちを中心に、村人の村意識に訴え、村人たちの共通の利益となる希望を事業化し、その実現に向かって村の自立的な力を引き出すことをプロジェクトでは実践的に試行錯誤した。したがって、特定のグループをターゲットに融資や研修を与え、効率的な支援を目的とするターゲット・グループ・アプローチに対し、D村での試みは、村のコミュニティ全体を相手にしていることから、コミュニティ・ディベロップメントという農村開発の手法の一部と位置づけることができよう。しかし、私たちは、D村でのアプローチを、コミュニティ・ディベロップメントではなく「在地化した農村開発」と呼んでいる。それは、農村開発を村人たちとの共同事業と位置づけ、根底に村という実体に学ぶという姿勢を重視したからである⁽²⁾。

世代を越えて人々が暮らしてきた村という在地には、社会組織、技術、生活の様式などに、「村のやり方」とでも表現できる在地性を強く感じさせるものがある。だからこそ、契機は外から導入された制度や技術、植物であっても、村に馴染んだものは、あたかも村に固有の永年の年月を経てきたかのように、人々はそれらの制度や技術、植物を使いこなし利用している。

村という実体に学べば学ぶほど、発展の持続性や村人の参加を目的とした農村開発にとっては、「村のやり方に馴染む」ということが最も重要であることが理解されてくる。換言すれば、在地性をいかに把握し、村人によって事業がいかに在地化されうるかが、D村での農村開発では問われつづけたの

である⁽³⁾。

以上のような農村開発を試行してみたいと考えるようになったのも、D村の在地性の輝きが強烈であったからにほかならない。特にそのことを、村人の共通の利益として期待された農村インフラ（集落道路、定期市、コンクリートの橋、郵便局）整備事業の実現に向けて発揮された、在村のリーダーたちのリーダーシップと村人の村意識に私は感じ、そこに学ぶことができた。これは、プロジェクトが共同事業の農村開発であったからこそ可能になったのであると自負している。自立を要求し、そうならないことを嘆く前に、自らが自立的に行動する援助が私たちに求められているのではなかろうか。

このような問題意識によって本章をまとめた。したがって本章では、まず道路整備事業の詳細にふれながら、私たちが学ぶことができたリーダーシップと村意識について考察し、次に、D村でのインフラ整備の背景と直接的な経済効果を、現場で事業に直接関係した者の感想を交えながら検討する⁽⁴⁾。本報告は前述の国際協力事業団の研究協力プロジェクトのD村での活動記録の覚え書きであるが、バングラデシュの村の社会や人々、農村開発の可能性の理解に対し、多少なりとも役立つとすれば望外の喜びである。

第1節 在地のリーダーシップと村意識

1. 村の組織と集落道路整備事業

英語の Village Community は、一般的にはグラム (Gram) もしくはガオン (Gaon) や、パラ (Para) とベンガル語で呼ばれている村落単位に相当する。私が慣れ親しんでいるD村周辺では、人々はグラムとガオンはほぼ同義語として用いる。しかしパラはグラムよりも小さいコミュニティで、比較的明確な地理的境界をもっている。D村では、ウットール（北）、モッドム（中）、ポルボ（東）、ドッキン（南）の四つのパラが一つのグラムを作っている⁽⁵⁾。



①1993年1月12日にD村の小学校で開かれた村落委員会の委員と役員を決めるためのグラム・ショバで、最後に挙手によって承認をする村人たち。200名ちかくの村人が集まり、大教室はいっぱいとなった。村人たちの笑顔が印象的だった。

グラムとパラの村落単位に注目して、D村の農村開発をすすめるためにプロジェクトではグラムに村落委員会が組織された。マタボールと呼ばれている在村のリーダーたちが、村の全体集会（グラム・ショバ）で推薦されて、村落委員会の委員に選ばれた（写真①）。委員の定数は、各パラに散らばって住んでいるマタボールたちの人数と、世帯数に応じて、男性13人（北4，中3，東3，南3）、女性4人（各パラ1）が、それぞれ割り振られた。

村落委員会が、最初に取り組んだ住民参加による事業は、1992年末から93年4月にかけて行われた、D村から舗装された国道までのフィーダー・ロードの整備であった。この事業において、以後の村落道路整備事業の柱となる住民参加の具体的な方法であるセッチャスロムと呼ばれている労働奉仕が試された。結果は、労働奉仕による道路整備が村人にとって初めての試みであったことや、フィーダー・ロードはユニオン評議会が監督する道路であるという村人の意識などが原因となり、当初予想したほどには村人たちの直接的な参加が得られなかった⁽⁶⁾。また、地方行政と村人とのリンクを促進させるために、農業改良普及員や保健衛生普及員などの、村人に直接行政サービスを提供している補助役人たちと村落委員会との月に1度の連絡会議が93年2月からプロジェクトの事業として始まっていた⁽⁷⁾。この事業においても会議

の内容が一般の村人にうまく伝えられていなかった。93年6月頃には、一般の村人たちと村落会議、プロジェクトとの乖離が顕著になり、プロジェクトの活動が始まって半年、村落委員会に頼りすぎていた住民参加の方法に修正を迫られたのであった。

事態を重くみた私たちプロジェクト関係者は村落委員会との間で1993年7月に、プロジェクトの事業計画、村の組織に関して真剣な話し合いをもった。そして一般の村人が事業内容の選定と決定にもっと参加できるパラ・ミーティングという制度を発足させた。村落委員会の発足がそうであったように、村人全体にかかわる問題が浮上したとき、D村の習わしであるグラム・ショバがマタボールたちの呼びかけで開催される（村人の誰もが自由に参加できる全村規模の寄り合い）。パラ・ミーティングという制度は、パラをグラムに見たててグラム・ショバに習った試みである。パラ・ミーティングは一般の村人には理解しやすい制度であったようだ。パラの各世帯（世帯はカナと呼ばれている）に声をかけ、出席者を募った。グラム・ショバと同様、貧富の差にこだわることなく、世帯主と自他ともに認めている男性たちがパラ・ミーティングに集まった。こうして、パラ・ミーティングの場で「村人たちの共通の利益」としての集落道路整備事業が検討された⁽⁸⁾。

パラ・ミーティングにより、一般の村人のプロジェクト事業への参加意識は目に見えてよくなるとともに、村のリーダーたちである村落委員会との乖離という危機も克服された。後述するように、集落道路整備事業は村落委員会とパラ・ミーティングという住民参加のための組織なくしては推し進めることが非常に困難であった。この経験をもとに、D村が属する行政区シャハデプール・ユニオン（以下、Sユニオン）の三つのグラムでは、集落道路整備事業の対象をパラとし、パラ住民の合意形成の場としてパラ・ミーティングを位置づけ、村落委員会に相当するパラ（集落）道路整備委員会が組織された。

以下、D村、Sユニオンで実施された集落道路整備事業について検討をすすめる。

2. D村集落道路整備事業

雨季の真っ最中の1993年7月に、集落道路整備事業が発案されたが、実際に、D村で道路の修理や新たな建設のための土盛り作業ができるようになるのは、洪水による湛水がひき、雨季に栽培されるアマン稲の収穫が終わる12月に入ってからである。この7月から12月の期間をめぐり、事業の具体的な計画がパラ・ミーティングで練られ、一般の村人の合意が得られることをめざした。毎月の第3週に、D村の四つのパラでそれぞれ、ミーティングが開催された。

後に述べられているように、集落道路整備事業には数十万タカという土盛り経費が必要で、この費用の多くをプロジェクトが負担したのであるが、リーダー道路の整備事業の反省から、事業への参加意識と、村の共有財産をもつことで村意識を高めるために、プロジェクトは次の二つの条件を再度強く提示した。

- (1)道路建設と修理のための土盛りの仕事には村の全世帯から1日の労働奉仕、もしくは、それに代わる1日の土盛り人夫賃25タカの寄付の提供を徹底する。
- (2)新しい道路にかかる土地と道路の土盛り用の土は村からの無償寄付による。

さて、氾濫原に立地しているD村ではパラとパラを結ぶ道路は、雨季の洪水の湛水により冠水し、人の往来に困難するのが常であった。このため、この問題を解決しようとする集落道路整備事業は大方の村人に歓迎された。しかし実際に新たな道路の建設予定となる土地の持ち主は困惑した。パラ・ミーティングでは、新しく建設される道路の位置をどこにするかが、村人たちの最も大きな関心となった。土地所有の規模にかかわらず、自分の土地が新しい道路のために潰されることを心よく思う人はいない。道路をどこに通すかについては、実に困難を極めた。マタボールと呼ばれる在村のリーダーた

ちの粘り強い交渉を抜きには新し道路はできなかつたであろう。過去はどうであれ現在では、強権的に村人から土地を提供してもらい新しい道路を村のなかに作ることは不可能であることを私は強く感じた。実際、説得には時間と交渉の妙が要求された。マタポールたちは地主の心理的な負担を軽減するために、新しい道路の建設に先立ち、村内の政府の土地と登記されているハロットと呼ばれている道路のなかで、いまだに土盛りされていないハロットでの作業にまず着手した。まずハロットが高さ1メートル20センチ、幅3メートル60センチに土盛りされた。ハロットの土盛り作業がクッションとして好都合に働き、その後、土地収用の問題が円満解決した箇所から新たな道路が建設されていった。

D村での集落道路整備事業に使われたプロジェクトからの土盛り用補助金は、25万8145タカ、村人からの労働奉仕は1万6405タカであった。この数字のみをみると、いかにも村人の貢献度が少ないように思われる。しかし、この事業をプロジェクトと村人との共同事業と考え、道路用地となった土地や土盛り用の土を時価で換算すると、新しい道路3キロメートルのために提供された土地2.60エーカーの価格は、1995年6月の時価で約26万タカ（1エーカー当り10万タカ、1タカ約3円）であり、全長5キロメートルの道路の土盛

表1 D村における集落道路事業（全長5km）の経費の内訳

(単位：タカ)

	プロジェクト の 負 担	村人の負担	合 計
土盛り経費（5km）	258,145	16,405*	274,550
新道路の土地（3km）	0	260,000	260,000
土盛り用の土（5km）	0	36,900	36,900
合 計	258,145(45%)	313,305(55%)	571,450(100%)

(注) *このうち10,630タカが現金で寄付された。人夫賃の換算は約25タカである。ただし、D村の集落道路の一部は、ドッキン・パラに隣接するアクア・グラムの一部集落をカバーしていたので、その集落30世帯から600タカの現金の寄付を受けている。この寄付金も含まれている。

(出所) タンガイル・サイトの1994年7月～95年6月の活動年次報告書（ベンガル語）p. 15と筆者の聞き取りによる。

りに用いられた土を購入したならば、3万6900タカである。合計29万6900タカが無償の寄付によって村から提供されたことになる(表1参照)。つまり、全経費の55%が村人によってまかなわれたことになる。

現在(1997年3月)、世界銀行が中心となった国際援助によって、ジャムナ川に橋をかけ、橋へのアプローチ道路がD村から十数キロメートル離れた村々の土地を取用して作られている。D村の村人の話しによれば、この道の用地に屋敷地もしくは耕地などの所有地がかかった人々に対して、エーカー当り、屋敷地に対して40万タカ、耕地に対して16万タカが支払われているという。このことから理解されるように、集落道路とはいえ、いかに住民の負担が大きく、その分、住民の期待も大きかったかが理解できよう。この数字に表れているように、D村のリーダーたちであるマタボールの活躍は、経済的にも大きく、けっして過小評価されるべきではなからう。

3. Sユニオンにおける集落道路整備事業

(1) ユニオン連絡会議での交渉

D村の集落道路事業の経験を活かし、村に最も近い地方行政の単位であるユニオンにおける事業のあり方を模索したのが、Sユニオンにおける集落道路整備事業である。1994年4月にユニオン評議会事務所で開催された、同ユニオンで働く行政機関の補助役人たちとのユニオン評議会との連絡会議の場で、ユニオン内のD村以外の三つのパラで集落道路事業を実施したいという提案をプロジェクトのスタッフが行った⁽⁹⁾。プロジェクトが提示した条件は、以下のとおりである。

- (1) 計画に対しパラの住民たちの合意ができていること。
- (2) 計画が実施されるパラの住民は1日の土盛り作業を、労働奉仕もしくは、それに代わる人夫賃(30タカ)の寄付で代用すること。
- (3) ユニオン評議会に支払われるパラの全世帯のユニオン税を、この年までの未納分を含めて完納すること。

- (4)以上の三つの条件を満たしたパラに約3万タカの補助を出し事業を実施する。
- (5)この事業の実施のために、パラにおいて集落道路整備事業委員会を作ること。
- (6)事業は、上記3条件を満たしたパラを優先し、順次三つのパラで実施する。
- (7)集落道路整備委員会とプロジェクトのスタッフが共同で実施運営にあたる。
- (8)パラの選択については、ユニオン評議会の議員に任せる。ただし議員は、パラのマタボールたちと連絡をとり、パラに在住する村人を集めてパラ・ミーティングを開催し、上記の計画を伝える。

以上の条件のうち、私たちが特に注目したのは、(1)と(3)である。それは、D村での経験から、新しい道を作るためには、住民の合意は不可欠であることを十分に知っていたことと、ユニオン評議会への税金の未納は、バングラデシュの農村開発においては一般的に知られている問題だからであった⁽¹⁰⁾。

ユニオン評議会は、住民から税金を徴収できる権限が与えられ、行政が実施するインフラ整備の計画案を作成し現場での実施の中心的役割を担っている。まがりなりにも地方自治体的機能をもった村に最も近い行政機関であると言えよう。ユニオン内のインフラ整備事業である FFW (Food for Work), RMP (Rural Maintenance Programme) などの小麦の現物支給 (数万から数十万タカ相当) の補助金に比較すれば、ユニオン税を主とするユニオンの独自財源から使われるインフラ整備予算は数千から数万タカとけっして多くはない⁽¹¹⁾。しかし上位の行政単位であるタナ (郡) やジラ (県) に最終的な決定権があるひも付き補助金と異なり、ユニオン評議会の自由裁量によって用途が決定できるこの財源は、ユニオン評議員や村人にとっては金額以上に重要な位置にある。特に、D村周辺は氾濫原で雨季には毎年洪水を受ける。洪水を排水するために土盛りされた道路は所々で切断されバンガと呼ばれる排水路が設けられているが、雨季には川のように流れ、乾季には干上がり道

となるこのバンガに雨季には竹の橋が架けられることが多い。Sユニオンの自主財源によるインフラ整備資金は、ユニオン評議会議員が各自の選挙区の村人の要望に答える形で、この竹の橋の設置のために使われる⁽¹²⁾。

しかし残念なことには、国の農村インフラ整備事業の出発点が、アメリカからの援助小麦を財源としたFFWの名の下に行われた乾季の貧農への雇用対策であったことで、ユニオン評議会は国から支給される小麦をいかにバラまかくかに腐心し、税などによる住民の直接的な負担による住民参加型のインフラ整備という発想を封じ込めてきたのであった⁽¹³⁾。その結果、ユニオン評議会がもつ地方自治体的な性格が弱められてしまった。

単純な発想かもしれないが、ユニオン評議会の自主財源が計画どおりに確保され、国からの補助金と組み合わせることによってユニオン・レベルにおいてインフラ整備事業が回転しはじめれば、ユニオン評議회를軸に自立的かつ持続的な事業が住民参加により十分に展開可能であると私たちは考えたのであった⁽¹⁴⁾。全国に広がる行政制度であるユニオン評議会で実際に事業が実施できてこそ、他ユニオンもしくは地域への事業展開が確かなものになり、この事業が一つの農村開発の手法として説得力をもつことも事実で、これがユニオンにおける集落道路整備事業の最終的な目的でもあった。

1993年8月以来毎月開かれていたユニオン連絡会議において、94年4月以来、集落道路事業は重要な議題の一つとなった。連絡会議の議事録の作成や、実際に現場での事業推進の中心的な役割を果たしたD村のプロジェクト・スタッフによる事業年次報告書(94/95年度、ベンガル語タイプ)の記録に詳しいように、この事業が初めからすんなりとうまくいったわけではない。事業が口込みと掲示版によって議員の選んだパラの住民に伝えられてから、3カ月後の8月15日までに、五つの村(グラム)のそれぞれ一つ一つのパラから道路整備事業の計画書がプロジェクトのD村事務所に提出された。10月には、先に述べた条件を一般の村人は理解しているかどうかの確認を兼ねて、それぞれのパラでプロジェクトの村スタッフが出席して、パラ・ミーティングが開催されている。10月の中旬から11月の中旬の約1カ月の間に、計画書に記

載された道路の測量がスタッフたちによって行われた。測量をもとにした土盛り用の土の量が測定され、スタッフによって、10月26日のユニオン連絡会議において土の量とそれにかかる人夫賃が発表された。12月8日までには、五つのユニオンのなかで、三つのパラがユニオン税を完納したと村のプロジェクト事務所に連絡があった。12月13日のユニオン連絡会議において、三つのパラのうち、まずパトンド村のドッキン（南）・パラでの事業実施が決定された。このようにパラが決定されるまでにすでにこれだけの時間と労力が割かれたのであった。

(2) パトンド村ドッキン・パラでの事業経過

12月22日に、パトンド村ドッキン・パラにおいてマタボールたちと村人たちの参加により起工式が行われ（写真②および③）、Sユニオンにおいて集落道路整備事業が始められた。しかし、決定過程と同じように、すんなりと事業が遂行したわけではなかった。このパラではハロット（公道）を高く土盛りすることが事業内容となったが、ハロットの位置が問題となった。当初、ハロットの一部が集落道路整備委員会のM氏のみが耕地として使用していると見なされ、この機会にハロットの道路幅と位置を村の地籍図どおりに戻すという決定がなされたのであるが、実際は、同じく村のマタボールであり集落道路整備委員会の委員でもあった中学校のS先生の池の土地もハロットの一部であった。このようなハロットの不法な使用はD村において起きていた。ハロットを屋敷地や、池、耕地として私的に利用することは、バングラデシュではけっして珍しいことではない。この問題が実際に作業を始めた12月28日に表面化した。

この日の朝、日雇い人夫によって土盛り作業が本格的に開始されるはずであった。いざ土盛り作業が実行される段階になって、SM氏が人夫の作業を止め、反対したのである。M氏は、自分の耕地の一部となっているハロットの土地を返却してもよいが、S先生の池の一部となっているハロットの土地も返却されることが条件であると言いつ張った。翌日の12月29日にパトンド村



②1995年3月31日のシャハ・パラの起工式の始まりの様子。両手のひらを胸の前に置き、アッラーへの祈りであるドーアが参加者によってささげられる。起工式の様子はD村を含めた他の村々でも同じであった。



③祈りが終わると、マタボールたちによって最初の鍬が入れられる。儀礼的に、頭に載せた竹かごで土を運ぶ。シャハ・パラの起工式にて。

のマタボールたちのまとめ役でもあり、委員会の委員長でもあるSユニオン評議会の前議長A氏が2人の調停に入りS先生が同意した。12月31日に、S先生は竹で作られたパラサイティングと呼ばれる土砂止めを池に自ら設置し、ハロットの土盛り作業が開始されたのだった。

上記の問題以外にも、以下のような問題が初期に発生していた。

- (1)土盛り用の土を購入する経費をプロジェクトが用意していると、間違っ
た話をマタボールたちがパラ住民に伝えていた。
- (2)日雇い人夫にプロジェクトの日本人たちは高額で日当を払うので、安い
日当では仕事を引き受けるなとマタボールたちが説いていた。
- (3)提示された条件では、事業が実施される予定のパラの住民のユニオン税
は完納されていなければならないが、完納していた住民のリストのなか
に他のパラの住民を入れ、さも事業が実施されているパラの納税義務を
負っている住民がすべて完納しているとみせかけていた。

プロジェクトのスタッフたちのマタボールたちに対する毅然たる説得により、初期の問題を乗り越り事業は進行した。次に直面した問題は、パラ住民の労働奉仕をいかに引き出すかということであった。村のマタボールたちである集落道路整備委員会は、プロジェクトで準備されている土盛りのための予算がすべて使われてから労働奉仕をすると、この時点での労働奉仕による作業を拒否した。これまでの人夫費用を差し引いた予算額の資金を委員会に譲渡してくれれば、残りの土盛り作業は、委員会が責任をもって完成すると、プロジェクトに申し出があった。委員会は、当初、ユニオン評議会が行っている道路整備事業とプロジェクトの事業を同一視していたのである。ユニオン評議会が請け負う事業は、予算のすべてが使用されることはまったくと言っていいほどなく、大抵は数十パーセントが使用され、残りの使途は雑費として消える。この事実は、バングラデシュの農村部においては公然の秘密であり、パトンドの委員会の面々がそう考えるのも無理からぬことであった。しかし、単なる道の完成以上に、住民の直接参加を得ることがプロジェクトの目的であったので、このような委員会の申し出に対し、思いきった対応をとった。労働奉仕で土盛りがなされないかぎり、仕事を中止したのである。プロジェクトの補助金によってスタッフが人夫を雇って土盛り作業を半ばまで完成し、パラ住民による労働奉仕による土盛り作業を待った。

D村の事業の経験から、スタッフたちは労働奉仕の引き出し方を学習していた。道路をほぼ完成してしまうと、労働奉仕を引き出すことは困難となる。

本来村の住民が負担するはずであった一部の土盛り作業も、注(3)に触れたようにこれまでのユニオン評議会がつくってきたインフラ整備事業の「文化習慣」により、プロジェクトの経費により必ずできると確信するようになってしまっていた。この村もその例外ではなかった。1995年1月12日、プロジェクトの意向が委員会に伝えられ、事業は中断された。

この日から1、2日後に、スタッフがマタボールたちを説得に出かけるが、彼らの態度は固く、中断が継続された。3月15日までに、労働奉仕の作業が実施されない場合は、事業は中断するという最後通牒がプロジェクトから委員会に伝えられた。結局、委員会は会議を開き、3月4日から労働奉仕により作業が始められ、3月10日までの間に、延100世帯分の労働奉仕が行われた。この間、スタッフたちは、毎日、労働奉仕が確実に実施されているかどうか、リストをもとに現場でチェックを行った。

3月13日から再び人夫により土盛り作業が実施され、3月26日にドッキン・パラの集落道路事業は完成した。

(3) パトンド村モッド・パラへの事業の拡大

いざ道路の完成が近づくにつれて、マタボールたちは不正が起きていないことに納得するとともに、労働奉仕に対しても理解を示した。3月22日には、委員会とモッド(中)・パラの住民から、モッド・パラでもハロットでの土盛り作業を行いたいという申し出がプロジェクトに寄せられた。以下の条件がプロジェクトより提示され、臨時の事業がモッド・パラでも実施された。

- (1) 予算の都合上プロジェクトの補助金は1万タカしか出せない。残りはすべて労働奉仕で道を完成すること。
- (2) 予算年度が4月～3月である国際協力事業団の会計規則に従った予算執行の都合上、15日以内に仕事を完了すること。
- (3) 労働奉仕分の土盛り作業が完了してからプロジェクトの補助により土盛り作業を実施する。

3月28日にモッド・パラの人々とのミーティングがもたれ、上記の、かな

りきつい条件が住民やマタボールたちに示された。整備されるべき道のりが測定され、総額約1万2500タカの土盛り人夫賃が必要であると算出された。条件よりも早く3月31日までの間に、村人の労働奉仕による作業が完成され、1万タカ相当のプロジェクトの土盛り分が残された。約2500タカの土盛り作業が53世帯のバラ住民でまかなわれたこととなる。1日の労働奉仕を30タカと見積もれば、世帯によっては2度以上労働奉仕に参加した計算となる。委員であるマタボールたちの様変わりには驚くべきで、すっかりプロジェクトの方式に慣れたのか、このモッド・パラの事業では、毎日、住民の労働奉仕作業を指示していた。

労働奉仕分の土盛りが終了した後、4月7日から12日間にかけて、1万タカの請負契約により日雇い人夫グループたちが残された土盛り作業を行った。スタッフたちは、1～2日おきに人夫賃を渡し仕事の進展具合を監督した。こうしてモッド・パラにおける土盛り作業が完了した。

以上がパトンド村におけるバラ道路建設事業の記録である。ドッキン・バラでの苦労が嘘であったかのように、モッド・パラにおいては、さしたる障害もなく事業を終了した。このことは、実際に現場で村人との交渉や作業の監督にあたったスタッフが最も認める点である。後日談として耳に入ってきたのは、この村では、以前70トンの小麦支給によるユニオン評議会道路整備事業が実施されたが、実際に出来上がった道は30トンでも十分であったという評判が立っていた。このような不正はバングラデシュの村々ではよく耳にすることで、パトンド村の住民もユニオン評議会が実施する道路整備事業に対して、あきらめにも似た憤りを感じていたのであろう。不正もなく、提示された予算どおりに仕事の実現されたことで、プロジェクトが村人の信頼を得たと私は感じている。この点がドッキン・バラとモッド・バラでの事業への村人たちの取り組み方の差によく表れていると言えよう。

(4) ユニオン道路整備事業の結果とスタッフたちの意見

パトンド村の二つのバラから始まったユニオン集落道路整備事業は、アク

表2 Sユニオンにおけるパラ集落道路整備事業実績

(単位：タカ)

村名	道の距離 (km)	経費負担		総経費	未納ユニ オン税	今年度ユ ニオン税	税総額
		プロジェクト	村人*				
アクア	0.66	29,990	4,000	33,990	1,520	1,550	3,070
パトンド	0.72	33,910	6,000	93,910	1,549	5,589	7,138
バニアファイル	0.48	20,000	3,500	23,500	1,110	3,021	4,131
合計	1.86	83,900	13,500	151,400	4,179	10,160	14,390

(注) * 村人の労働奉仕は、1人1日行った場合、30タカで換算した。

(出所) Kazuo Ando, Habibur Rahman and Muhmmad Salim, "Village Report of Dakshin Chamuria-The Use of Locally Existing Knowledge and Thought," Report of the Workshop on Rural Development Experiment Project 9th to 11th July 1995, edited by Md. Mazharul Islam etc. BARD & JICA, Bangladesh, 1995.

ア村のドッキン・パラ、バニアファイル村のシャハ・パラと順々に事業が展開された。その結果が表2にまとめてある。

三つの村で実行された集落道路整備事業は、いずれもハロットと呼ばれる公道の土盛り作業であったので、D村のような土地収用の問題が起こっていない。その分、事業展開はD村よりも無理がなかった。この点については幸いであったとも言える。先にふれたように当初五つの村から計画の提案があったが、そのうちの二つの村では、この年ユニオン評議会により道路整備事業が実施されることになったり、新規の道路に対しては土地の無償提供がなく、結局、プロジェクトの対象外となってしまった。土地の無償提供については当然考慮されなければならない問題であるが、表2から理解されるように未納ユニオン税や、労働奉仕の負担はけっして小さい額ではなくマタボールたちやスタッフたちの説得に対して、一般の村人が十分に応えた結果であると私は考えたい。このように納得がいく結果となった理由を、村での実際の事業の中心的な役割を果たしたスタッフたちの意見を参考に、次のようにまとめることができる。

- (1) パラ道路委員会の委員たちが事業内容を十分に理解できていたこと。そして、プロジェクトから支給される補助金の予算額があらかじめ決定さ

れていて、パラ・ミーティングにおいて事前に村人に提示され、不正なく執行された。

- (2)この事業は、もともと村人たちの提案から始まった経緯が示しているように、村人たちはこの事業がもたらす利益を直感的に理解できていた。
- (3)事業の進み具合は誰にも理解できるほど、目に見えるものであったので、村人の誰もが、労働奉仕または、それに代わる人夫賃の寄付を最終的には拒まなかった。
- (4)事業で整備された道路は地図で示され、パラ・ミーティングで住民の合意が形成されたので、住民の誰もが内容を知ることができた。
- (5)労働奉仕の作業を実際に行う世帯と人夫賃の寄付をする世帯を区別したリストが準備されたのでチェックがゆきとどいた。
- (6)パラ集落道路整備委員会の委員であるマタボールたちの、有効で自主的なリーダーシップが発揮された。

事業が終了した1995年6月の時点でもSユニオンの他の10のパラから、ぜひ事業の実施を検討してほしいという要望がプロジェクトに届いていた。それほど集落道路整備事業はインパクトがあったと言えよう。表2で示されているように、もしユニオン税の用途が十分に村人の利益になると村人たちが理解すれば、ユニオン税を支払うことに躊躇しないのではなかろうか。私たちの記録は、この種の事業においてマタボールたちは十分に期待に応え得ることを示している。

なぜパラ集落整備事業ではマタボールたちは十分にリーダーとしての役割を果たすことができたのか、この点について次節で検討を加えてみたい。

4. リーダーシップと村意識

(1) 借用する権威と開放系社会

マタボール集落道路整備事業の運営にあたったD村における村落委員会とパラミーティング、Sユニオンの三つの村におけるパラ集落道路整備委員会

表3 パトンド村マタボールとドッキンパラ集落道路委員会委員

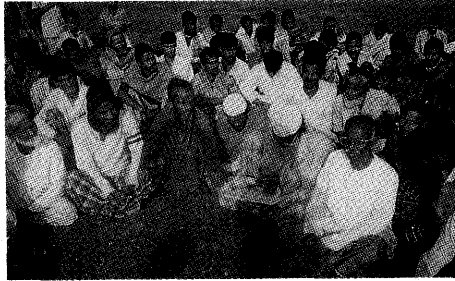
マタボール名	マタボールの種類	居住パラ	委員会における役割
1. A. L.	グラム	ドッキン	委員長
2. S. M.	グラム	ドッキン	委員
3. S. Ma.	グラム	モッド	委員
4. M. U.	パラ	モッド	委員
5. A. G.	パラ	ドッキン	委員
6. A. J.	グラム	ドッキン	
7. A.	パラ	ドッキン	書記
8. Ar.	グラム	ドッキン	
9. J. A.	グラム	ドッキン	委員
10. F.	パラ	ウットール	委員
11. A. Ga.	グラム	ウットール	
12. M. M.	パラ	ウットール	
13. J. U.	グラム	ウットール	
14. S. A.	パラ	ウットール	
15. A. M.	ユニオン評議会議員	モッド	委員
16. N.	?	ウットール	委員
17. A. R.	?	モッド	委員

(注) D村周辺の村々では、マタボールはその影響力の及ぶ範囲でグラム・マタボールとパラ・マタボールの二つに区別されている。

(出所) Kazuo Ando, Habibur Rahman and Muhmmad Salim, "Village Report of Dakshin Chamuria-The Use of Locally Existing Knowledge and Thought," Report of the Workshop on Rural Development Experiment Project 9th to 11th July 1995, edited by Md. Mazharul Islam etc. BARD & JICA, Bangladesh, 1995.

でのマタボールたちの活動から、彼らが発揮するリーダーシップと、それを認め、それについていく一般の村人がもっている村意識が見えてくる。マタボールたちのリーダーシップがいかに発揮されるのは、村人間の意見の対立の調整においてであった。対立する人たちの説得のために、マタボールたちは自分の住むパラ、グラムではない、他のパラやグラムのマタボールの権威を借用しているとしか考えようのない行動をとっていたのである。

私たちプロジェクト関係者は当初パラ道路委員会の委員はこのプログラムが実施されるパラのリーダーであるマタボールたちからのみ選ばれると勝手に考えていた。しかし、シャハ・パラを除くSユニオンの二つの村のパラ集



- ④1993年12月14日、D村で起きた結婚目的の村の娘の誘拐について、緊急のグラム・ショバの寄り合いが村の小学校の校庭で開かれた。犯人はD村と隣のB村の若者であることから、マタボールたちが問題を重視したのであった。前列に座っているのが、マタボールたちである。それを取り巻くように一般の村人が座る。ビチャールの様子もこれによく似ている。向かって右端の眼鏡をかけた人が、近年のマタボールのなかで最も人望のあったアヤトツラ・アリ・ムツラ氏。すでに故人となってしまうが、同氏にはプロジェクトは大変お世話になった。

落委員会では、プログラムが実施されたパラ以外の他のパラに住む村（グラム）のマタボールと呼ばれる数人が、委員として招かれていた⁽¹⁵⁾（表3参照）。

この事実を指摘すると、パラでの争いを解決するためには、揉め事が起きたパラに住むマタボールは、たとえグラム・マタボールであろうと、パラの住民の信任を得るため他のパラのグラム・マタボールの助けが必要であると言う答が村のスタッフや村人たちから返ってきた。

パラ内で起きた事件は、まずはそのパラに住むグラム・マタボールでもあるパラ・マタボールたちによって開かれるパラでのビチャールと呼ばれる寄り合いによって解決がはかられる（写真④）。このとき、調整役の他のパラに住む数人のグラム・マタボールがビチャールに招かれる。

そのビチャールの席では、問題となった村人間の争いが起きているパラのマタボールたちも日常生活を共にしている隣人である。彼らは、争われている事件解決への最終的な判断を下したくないように見受けられる。おそらく他のパラやグラムのグラム・マタボールの不在という状況下でのビチャール

の決断は、同じパラの隣人であるマタボールと、争いを起こしている村人の間の緊張関係を生むに相違ないからであろう。この隣人感情に加え、第三者の判断が当事者である争いを起こしている村人たちにとっては、より受け入れやすいと村人は指摘してくれる。つまりパラに住むマタボールたちは、たとえ事実として血縁関係がないとしたとしても、争いを起こしている村人たちと親戚同様の関係にあると考えたほうが理解しやすい。この権威の借用とも言える習慣が集落道路整備委員会にも踏襲されていたのである。村人たちのこの習慣は、身近に住む隣人や仲間との対立を避けるためのバングラデシュの人々の生きる知恵の表れであると、私には思える。

日本の常識的なコミュニティ意識 (Community Consciousness) と比較するならば、このマタボールたちが発揮するリーダーシップに関するコミュニティ意識のユニークさがよく理解できる。日本では他のコミュニティの権威が、問題が起きているコミュニティの内部対立の調停に入ることは希であり、よしとしないのが一般的な傾向である。そして多くの日本人にとっては形式的にせよ、1人の「長」が頂点に立つピラミッド型の構造をもったリーダーシップのほうが容易に理解されやすい。私は、自らの体験に照らして、そう思う。D村周辺の村々では、他のパラやグラムに住むマタボールが招待されるばかりではなく、絶えず複数のマタボールが出席する会合 (Council of Plural Mattabors) によって一般の村人を説得し、揉め事の解決や物事の決定を下していく。このようなリーダーシップのあり方を、私は「借用する権威 (Borrowing Authority)」と表現したい。

借用する権威によって発揮されるリーダーシップにおいては、あたかも自分たちの属しているパラやグラムのコミュニティの権威であるマタボールを無視するかのようになり、一般の村人はしばしば振る舞う。このような村人の振る舞いと、コミュニティのリーダーであるマタボールたちの関係が、バングラデシュの村落コミュニティを一見とらえどころのない、または、消散したようなイメージに見せることも確かであろう。しかし、このマタボールのリーダーシップは、グラムやパラに住む人々のコミュニティ意識の維持には欠

くことのできない工夫である。

(2) 二つのモードをもった村意識

先にも述べたように、D村周辺ではパラはグラムよりも小さい村落単位のコミュニティで、グラムよりも比較的明確な地理的境界をもっている。そしてD村では、マタボールたちは村落単位によって、パラのマタボールとグラムのマタボールに分類されている。各パラには、あたかもパラの代表であるかのように複数のグラムのマタボールが存在している。たいてい村人たちは、多くの時間を自分たちのパラで過ごす。同じパラに住む人々の所有する耕地は、村のなかでは比較的まとまって存在している。一つのパラには、いくつものグスティ (Gusti) と呼ばれる父系血縁に属する人々が一つのバリ (Bari) と呼ばれる屋敷地の集まりを作って、パラのなかで棲み分けながら混住している⁽¹⁶⁾。また、今では他のパラにまたがり住んでいるグスティの人々も、もともとは一つのパラに住んでいた。村人たちが、マティカタやチュクティと呼ばれる土方や請け負いの農作業のグループを作るときにも、同じパラの住民が主にそのグループの構成員となることが多い。これらの事実に加え、同じパラの住民は、日常生活のなかで、頻繁にお互いが顔を合わせる。パラは、グラム以上に村人にとってはなじみの深い村落単位なのである。したがって、同じパラに生活する村人たちは、自然に、彼らのコミュニティ意識である村意識を育む。つまりパラという村落単位は、日常生活のなかでの交流に基づいた村落単位であり、村人の連帯意識は、グラム以上にパラにおいて高いと指摘することができよう。

例えば、1995年に起こったジャットラ (村のオペラ劇) での問題がよい事例となろう。最初、ジャットラは、D村の四つあるパラのなかでウットール (北)・パラとモッド (中)・パラが共同してモッド・パラで開催するように計画されていた。しかし、劇の運営と配役に満足しなかったウットール・パラの少数の人々が中心となり、モッド・パラのジャットラが開催される同じ日時でもう一つのジャットラをウットール・パラで実行したのであった。パ

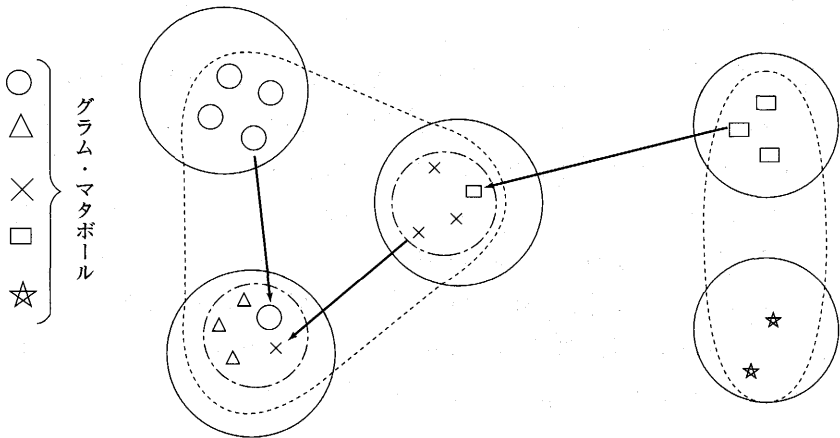
ラ間の対立は、農業改良普及局の展示圃をどの村人の耕地を借用して行うとか、畜産局の鶏の予防接種のための研修員を誰にするか村落委員会で決定しなければならないときにも顕著に観察された。建前として、村落委員会の委員は、委員が所属するパラの村人を推薦し、譲るところがなかった。

このことが示しているように、プログラムが村人の中の争いの種とならないためにも研修などのプログラムなどに村人を送る場合、人選は、パラのコミュニティ意識に十分な注意をはらって行われなければならなかったのである。一方、一般の村人は、権威として機能するグラムのマタボールたちの存在を通じて、グラムというコミュニティを感じているばかりでない。行政組織の関係者など、村外の人々によって自分たちの所属するグラム名で住所が呼ばれたときにも、呼び習わされた行政単位としての村落コミュニティのアイデンティティを村人は意識する。グラムは外に向かった権威を通じて村人が感じることができる意識的な村落コミュニティとなっている。

こうした一般の村人とマタボールたちの関係から見えてくるのは、パラが生活の場であり、地縁・血縁の隣人関係が作っているコミュニティの実体であるとすれば、パラの上位の村落単位であるグラム意識は、マタボールの存在と行政機関ないし外との関係で維持されている意識である。つまり、パラにおけるコミュニティの権威を維持していくために村人が共通して抱いている社会心理的な村落単位がグラムである。特にビチャールに見られるようにマタボールの権威を引き出し、村社会の平穩 (Security of Village Society) を維持していくためには、グラム意識は重要であると言える。このように説明できるD村の村意識は、コミュニティの実体と権威という二つのモードをもった村意識と表現することで、いっそう明確になろう (図1参照)。

したがって、バングラデシュの農村社会のイメージは、マタボールとグラムによって、パラがいくつも限りなくつながっているように私の目には映る。そう見ると、BRDBの協同組合事業のように、農村開発事業の受け皿を村(グラム)単位と設定し、グラムやパラを単なる地理的な村落単位と規定した事業が時に方向性を見失い、活動が低調に陥るのは、なるべくしてなった

図1 D村の二つのモードの村意識と借用する権威に関する模式図



借用する権威 ← (招かれるマタポール)
 二つのモードの村意識 { (ダッシュ) (グラム=コミュニティの権威=社会心理的単位)
 (実線) (バラ=コミュニティの実体=日常生活の単位)
 マタポールの会合 (ダッシュ) (集落道路整備委員会, ピチャール)
 (カウンセル)

(出所) Kazuo Ando, Habibur Rahman and Muhmmad Salim, "Village Report of Dakshin Chamuria-The Use of Locally Existing Knowledge and Thought," Report of the Workshop on Rural Development Experiment Project 9th to 11th July 1995, edited by Md. Mazharul Islam etc. BARD & JICA, Bangladesh, 1995.

結果のように私には感じられる、 Bangladesh の村人が育んできた村意識に対する配慮が欠けているのである。

5. D村の人々によって期待されているグラム・マタポールの役割

本節では、D村の一般の村人のもつグラム・マタポールへの期待とグラム・マタポールたちの過去の貢献を以下の箇条書きにまとめ、村意識で重要な役割をになっているグラム・マタポールで組織された村落委員会の農村開発における役割を考えてみたい。

- (1)倫理的な論理を駆使して村人の間に起きた揉め事を解決するためのビチャールを開催し、判定を下す。
- (2)村で擁立するユニオン評議会議員の立候補者などを決定するために、村の全戸に呼びかけを行い、皆の前に情報を公開するグラム・ショバと呼ばれるミーティングを開き、村のコンセンサスを作る。
- (3)村の近くを流れるロハジョン川が雨季、急激に増水し堤防の決壊の危機が増したとき、急激な洪水による濁流から耕地や家を守るための、他村との協同による緊急の土盛り作業のための労働奉仕に村人を組織した。
- (4)ハットと呼ばれる定期市を隣村のバニアプール(Baniafair)のマタボールたちの協力の下に村で開始した。
- (5)隣村のモヘラ (Mohela) のマタボールや政府との交渉によってD村の小学校を政府の小学校として認可を受けるために奔走した。
- (6)ユニオン評議会委員会が議員を通じて行う、ユニオン税の徴収や、洪水被害者のための救援物質の配分に対する協力を行っている⁽¹⁷⁾。
- (7)一般の村人たちが、ユニオン評議会、NGO、銀行、行政機関などのサービスを受けようとしたときに、助言と手助けを与える。特に、ユニオン評議会で開かれる Village Court (村の法廷) と呼ばれる裁判では、訴訟人と被告人の双方に1人ずつの議員と村の代理人がつけられる。代理人としてマタボールが招かれることが多い⁽¹⁸⁾。

以上から、グラム・マタボールは彼ら自身の村の人々に期待されているばかりか、隣村の人々やユニオン評議会、行政機関等、村の外からも村の権威として認められていることがわかる。最も顕著なのは、農業、保健、家族計画などの普及員が、必ずと言っていいほど、マタボールを尋ね村の事情の教えを乞うたり、協力を仰ぐことである。このようにグラム・マタボールは村の外の権威との関係を保つことで自分たちの権威を維持している。グラム・マタボールほど知られても注目を集めてもいないパラ・マタボールが中心となって開かれるパラ単位のビチャールにおいては、招かれた他のパラに住むグラム・マタボールたちが(問題が大きくグラム単位でビチャールが開かれる場

合は、近隣村のグラム・マタボールたち)が外の権威となる。この外の権威をうまく借用し、使いこなせることがマタボールに求められている。マタボールたちにとっては、コミュニティのなかで自分たちの権威を維持するために、外の権威との関係を絶えずしっかりしたものには保たなければならない。このマタボールたちの能力は一般の村人たちが期待するマタボールの役割からも実によく読みとれ、前述した「借用する権威」という言葉によって十分に説明できよう。パラに住む一般の村人にとっては、彼ら自身を一つにまとめるために、パラ・マタボールとともにグラム・マタボールを必要としているのである。

このグラム・マタボールの権威もしくはリーダーシップのあり方は、すでに詳細に報告した、ユニオンにおけるパラの集落道路整備事業の実施のための委員会の構成メンバーにも実によく表れていた。事業が実施されるパラの住人でないグラム・マタボールが、委員会の委員もしくは、委員長として選出されている。第三者の立場でもあるグラム・マタボールは、パラの人々を労働奉仕に参加させるためにはぜひ必要とされたのであった。

グラム・マタボールが委員である村落委員会は村の権威として地方行政に参加し、パラの人々へのリーダーシップを発揮する役割がプロジェクトでは期待された。しかし、パラ・ミーティングの導入の経緯が示しているように、村落委員会のみでは一般の村人を事業に参加させることは困難であった。一般の村人がグラム・マタボールの権威を受け入れる状況が必要とされたのである。それがパラ・ミーティングであり、村の人々が集落道路整備という村の誰もがその価値を認め、実現を願う(この願いをCommon Interestと私たちは呼んだ)公共性の高い事業であった。農村開発といえども、マタボールの権威が機能し、村人の参加を促すためには、村の平穩を維持したい村人たち皆の願いの実現のためのビジュアルで見られるように、グラムとパラの「二つのモードのコミュニティ意識」と「借用する権威」が生かされなければならなかったのであった。

限られた経験を通じてではあるが、D村周辺に代表されるような氾濫原に

位置する村落コミュニティの実体はユニークであり、村落委員会とパラ・ミーティングは、この習慣に馴染みのある制度であると、私たちは考えている。インフォーマルであったマタボールの存在で結ばれていた社会心理的で見えにくかったグラムの像を、村落委員会という組織を作ることで、一般の村人や、村へ来ている農業改良普及員などの行政組織の人々にとって、よりはっきりした像へとわかりやすくした。そしてパラ・ミーティングは、村において実施される農村開発プログラムに自主的に参加したい村人たちのフォーラムとなっているのである。

6. BRDB 系協同組合の限界

本節では、バングラデシュの農村開発関係者の頭を悩ませている問題である「政府系(Bangladesh Rural Development Board: BRDB)協同組合の活動がなぜ低調であるか」を、D村の農村開発の経験をふまえて考え、リーダーシップの側面から考えてみたい。

KSS (農民組合: Krishak Samabaya Samity), BSS (貧農組合: Bittahin Samabaya Samity), MSS (婦人組合: Mohila Samabaya Samity) と呼ばれる政府系の協同組合のリーダーシップには「借用する権威」の習慣が生かされていないことが、問題の基本的な原因を作っていると私は考えている。これらの協同組合のマネージング・コミティ (運営委員会) の委員たちは、第三者の介入なしに、自分たち自身でほとんどの運営問題の解決をはかっている。あたかも自分たちのコミュニティを閉じることによって、外部との関係を断っているかのようなのである。私は、このようなコミュニティを「権威の閉鎖系コミュニティ (Closed Community)」と呼びたい。

問題は、バングラデシュの村人たちが、「権威の閉鎖系コミュニティ」には慣れ親しんでいないことにある。D村周辺の村の事例でみたように、バングラデシュの一般的な村では「借用する権威」と「二つのモードのコミュニティ意識」が働いているとすれば、一つのコミュニティのリーダーシップは、

外部との関係なしには成立しえないはずである。外に開かれたコミュニティだからこそ在村のマタボールたちのリーダーシップが発揮されるのであり、このようなコミュニティは「権威の開放系コミュニティ (Opened Community)」と呼べるであろう。これが、バングラデシュの村人たちが最も受け入れやすい権威のあり方である。

習慣的に調整役をになっている「借用される権威」の不在の状況では、争いを避けようとする隣人感覚が、運営委員会の委員でさえも、リーダーであるマネージャーに対し直接文句を言うことができない状況を作ってしまう。外からの干渉がない場合、BRDBの関係者が嘆くように、発足当初の組合のマネージャーはその責をよく果たすが、数年の後には自らの利益ばかりを優先し、時には、組合員の預貯金の横領を平然と行うタウト (tout) と呼ばれる最も毛嫌いされるリーダーになってしまう。また、D村では、村落委員会が結成された当初、すでに存在していたKSSが新たな組合員の加入を拒んでいる問題が村落委員会に持ち込まれ、組合員の加入を認めるように村落委員会が勧告した。しかし、委員会の委員でもあった組合のマネージャーは、組合の問題は、組合が考えることで、外の干渉は受けない、とその要求を突っぱねた。外の権威を借りて自分たちのリーダーをコントロールすることには長けている村人も、いざ、外との交渉を制度の上で断たれてしまっている「閉鎖系コミュニティ」の形式をとる協同組合では、マネージャーの独断と横暴を止める機能が働かない。だから、当初「良かった」マネージャーの多くは、数年後には利己的で身勝手な「悪い」マネージャーに変身し、BRDB関係者から、タウト (tout) と呼ばれる存在と化してしまうのではなからうか。

協同組合などの、農村組織の持続的運営のためには、「借用する権威」と「二つのモードのコミュニティ意識」が機能するような組織制度が考案される必要がある。例えば、以下のような改良案が提案できよう。

- (1) 協同組合のなかに二つモードの指導的組織である運営委員会 (Executive Committee) と理事会 (Board of Regent) を作る。そして運営委員会委員長、理事長には過大の権限をもたせない。理事会はバングラデシュの政

府組織である BARD (Bangladesh Academy for Rural Development), BRDB, RDA (Rural Development Academy) などに習い、理事は、主に外部の組織の人間からなるようにする。つまり、理事会と運営委員会の関係は、村落委員会とパラ・ミーティングの関係にたとえるとわかりやすいだろう。

- (2) または、他の村のマタボールか、在村の他の組織のリーダーが、協同組合の一般の組合員の要請によって運営委員会の委員になれるようにする。こうすることで、組合員たちは、協同組合員である委員には言いにくいことも、招かれた委員には発言できるというチャンネルを作る。第三者の立場である招かれた委員は、「借用する権威」を逆手にとって、マネージャーや他の委員の暴走を制御できるようになる可能性が高い。こうすることで、組織運営の持続性を十分に高めることができる。

第2節 インフラの整備の効果

D村の村人の共通の願いの実現のために、集落道路整備、ハットと呼ばれる定期市の整備、村から国道までのフィーダー・ロードへのコンクリートの橋の設置、村の郵便局の開局の四つのインフラの整備事業がプロジェクトの中心的な事業となった。集落道路整備の詳細については、すでに前節で述べたとおりである。現場で事業に実際に参加した人間として、他の三つのインフラ整備事業の背景にふれつつ、その経済的效果について、感想を交えながら以下に報告してみたい。

1. 貧しい人々の生活を支えるハット

D村の東隣村であるバニアフォイル村（以下、B村）との村境に接する場所には、イード・ガ・マットと墓地がある。イード・ガ・マットは、モスリ

ム（イスラム教徒）の年2回の祭りであるイードのときに、ここに人々が一同に会してイードのナマージ（礼拝）をする。1986年3月、D村のマタボールたち、なかでも、すでに故人となったアヤトツラ・アリ・ムツラ氏の中心的な指導力で、他の村々のマタボールたちの協力と了解を得て、このイード・ガ・マツで、毎週土曜日の午後3時過ぎから日が沈むまでの間、定期市である青空市のハットが開催されるようになった。このハットは、チャムリア・ハットと村の皆から呼ばれている。

表4には、1986年当時D村の人々が通っているハットの開催日と、ハットまでの距離、ハットの開設年が示されている。この表が示しているように、86年当時、すでにD村の周辺には毎日、ハットが開催されていた。しかし、村人が最も利用していたのは、水曜日に開催されているエレンガのハットであった。エレンガはこの辺りの中心的な「まち」で、数多くの常設店があり、水曜日には大きな市がたつ。村人たちがあまり利用しなかったのは、週に1度のモスリムの礼拝日でもあった金曜日と土曜日に開催されていたハットであった。エレンガの土曜日のハットは規模が小さく、ポツラのハットは白米などの物を売りに行くためにのみ利用されていたという。こうした条件を考慮してD村のハットの開設日が決められた。一方、D村はユニオン評議会事

表4 1986年当時のD村周辺のハットの開催曜日とD村からの距離

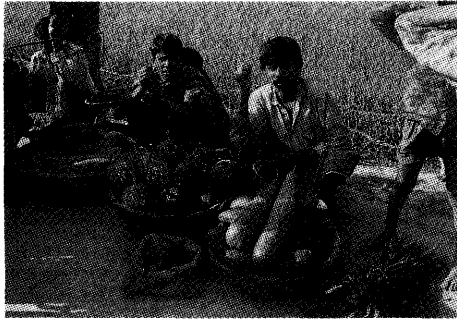
開催曜日	ハット名	おおよその距離 (km)	開始時代
金曜日	キィシュトシャ(タンガイル・タナ)	2	パキスタン
土曜日	ポツラ	4	イギリス
	エレンガ(この日はハットの規模が小さい)	4	パキスタン
日曜日	ニゴイル(ブクタとの距離約1km)	3	パキスタン
月曜日	ポウジャン	2	パキスタン
	スルース	2	パキスタン
火曜日	ベトイル(タンガイル・タナ)	3	イギリス
水曜日	エレンガ(エレンガ・ユニオン)	4	イギリス
木曜日	ポウジャン	2	パキスタン

(出所) 筆者の調査による。

務所があるポウジャンから国道にまで伸びる道路と、ブクタ、ニゴイルの各村からポウジャンまでのほぼ中間点に位置し、D村とB村の境にハットができることは、距離的にも、この地域の村人にとって望ましいことであった。このような背景があったので、チャムリア・ハットの開設がすんなりと周辺の村に受け入れたのである。これらのハットの他にも、94年末から火曜日午後開かれるようになった、D村から約2キロメートルの近距離にあるロシュープール(タンギル・タナ)のハットにもD村の人々は出かけている。

表4に示されているように、D村周辺のハットの歴史はけっして古くはない。チャムリア・ハットの開設が物語っているように、地元のリーダーであるマタボールの呼びかけで自主的にハットが始められている場合が多い。注目されるのは、ハットの数が増加しているのは、この地域の人口増加が顕著になるパキスタン時代以降であることだ。増加した人口の大多数は、耕地を持たない土地なし農民もしくは1エーカー以下の耕地を所有している貧農、小農と呼ばれる、いわゆる貧しい人々である。現在では土地なし農民は農村の総世帯の約5割に迫り、貧農、小農と呼ばれる世帯を含めれば、その数は7割以上となる。農業のみがこの人口を支えることは不可能で、機織りをはじめ糸を白米にして小銭を稼ぐ商売など、多くの非農業部門での活動がD村ではめだつ。それに加え、これらの人々の生計を支えているのがハットの存在であると私は言いたい。

2～4キロメートル以内のハットにおいて、D村の人々は週の毎日、白米や、魚獲り用のなげ網、野菜、果物など自分の家の生産物を売ったり、日常に必要な物を買うことができる。ハットでは少量の物を売ることによって現金を得、少額の現金で必要な量の物だけを購入できる。ハットが毎日どこかで開かれているということは、例え今日、売れなくても、または、買えなくても、明日にはまた売買の機会が保証されているということになる。小さく売って、小さく買うという行為を積み上げることで生活の維持を可能にするのがハットであろう。さらに好都合なことは、多くの客と複数の同じような物品を扱っている売り手の交渉によってハットでの品物の価格が決定される



⑤チャムリア・ハットの道端で自家製の野菜を
 売る人 (1993年3月6日撮影)。

ので、適当な値段に落ち着く。ハットに集まって物を売っている人々は、けっして資本力に富んだ人たちではない。ここが特に重要である。ハットに座る「商人」は品物をストックすることなく、絶えずフローな状態に置く。人々との交渉に任せることによって価格が決まり市が成立している⁽¹⁹⁾ (写真⑤)。

バングラデシュの農村で、なぜハットが必要とされ増えるのか。それは、このへんに理由がある。ハットこそが土地なし農民や、貧農、小農の生活を側面的に支えているバングラデシュ農村経済の柱であると私には思える。総人口1億2000万の約8割もの人々が農村部で生活し、さしたる工業化に成功しているわけでもないバングラデシュが、人口過剰が指摘されつつも粘り強くこれだけの人口を養っていけているのは、ハットを中心とした農村経済の順調な発展があるからであろう。そのことをいちばん承知してるのが、村に生活しているマタボールたちであり村人たちである。ハットに関連するインフラ、特に集落道路と、ハットそのものの整備が急がれる所以はここにある。

2. マタボールたちの資金調達が実現したハットの拡張

チャムリア・ハットが開かれるようになり、この場所をハット・コラと呼ぶようになった1986年以来、ハットは順調に発展した。プロジェクトが開始

された92年の時点でもすでに道の両側には常設店が数軒建ち、土曜日の青空市では、14 dec. (1 dec. は100分の1エーカー、約4平方メートル) の広さのロード・ガ・マットと道の端では、人が溢れてしまうほど混雑するようになった。この問題の他にも雨季の雨の日の市のために、雨避けの屋根つきの広場が望まれるようになった。

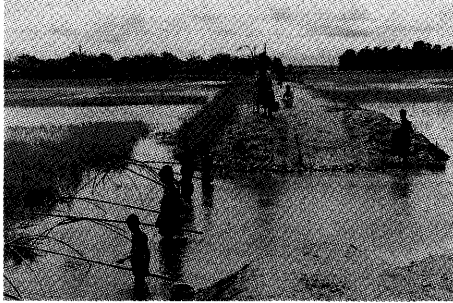
チャムリア・ハットには、隣のB村とD村合同のハット委員会が設けられている。村落委員会からハット委員会へ、ハットの整備のための会合をもつようにという申請を出し、そこで計画案が練られた。ハットの場所は、雨季には洪水により1メートル以上の湛水をみる。したがって、道路同様に土盛り作業が不可欠となる。そこで、プロジェクトからは土盛り経費と、プロジェクト終了後のD村の村落委員会の運営経費を作るために、村落委員会が所有者となる常設の貸店舗の建設費を提供した。ハットの拡張のための土地に関しては、道路と異なり所有者の耕地の一部を使用するというわけにはいかないで、購入することになった。また、ハットの土盛り作業に関しては、一部を寄付によってD村とB村の人々に負担してもらうこと、雨避けの屋根つき広場の建設はタナ(郡)のインフラ整備事業へ申請する、ということでプロジェクトと合意がなされた。当初、D村およびB村からはそれぞれ1万タカが寄付されるはずであったが、D村から約5000タカが集まったのみで、B村からの寄付はゼロであった。これは、B村のマタボールたちが、D、B村の所属するKタナを選挙区とする国会議員に陳情し、7トンの小麦(4万2000タカ相当)の補助や、国会議員からの直接の寄付、また、タナ評議会(タナ開発委員会)から3トンの小麦(2万4000タカ相当)のインフラ整備用小麦(補助金と同じ)を受けたことによる。タナへの屋根つき広場建設の申請はなされているが、1997年3月現在、いまだ実現していない。ハット整備事業については、村人の直接的な負担は5000タカと少ないが、私は、この5000タカがもっている意味は過小評価してはならないと考える。この寄付により、人々の関心が集まり、ハット整備事業は村の計画となった分、マタボールたちの不正を防ぎ、頑張りを引き出す原動力となっているからである。プロジ

ェクトからの直接の補助9万6000タカに対し、マタボールたちは行政や国会議員との交渉によって、さまざまな資金源から総計13万4200タカ相当の資金を調達した。一つ一つの事業では、ハットの整備は実現しなかったのであるが、マタボールたちは自らの交渉力によって、事業をうまく集中させた。これがハットの拡張、整備を実現させたのである⁽²⁰⁾（具体的な資金源と、それらの用途について参考のために注20に詳細を記した）。マタボールたちが本気になれば、ここまでできる可能性を秘めているというよい事例になろう。自助努力は単に待っているだけでは生まれない。ここに私たちが共同事業として援助事業を位置づける大きな理由がある。

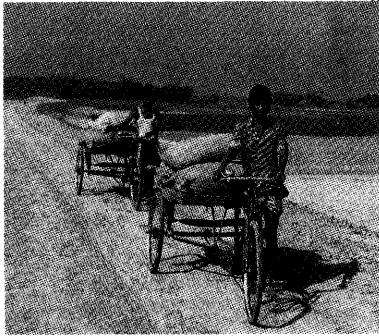
3. コンクリートの橋：嘆願から始まるインフラ整備事業の誘致

ハットの整備と同等、あるいはそれ以上に一般の村人やマタボールたちから望まれたのが、ハットと舗装された国道を結ぶ土の道の途中に位置しているボロ・バンガと呼ばれる幅12メートルの土が盛られていない雨季の洪水の排水路となっている場所にコンクリートの橋を設置することであった（写真⑥）。

1995年末にボロ・バンガに地方政府・農村開発省のプロジェクトによって、コンクリートの橋が完成されるまでは、その年、ユニオン評議会の予算があれば、雨季には、ここに竹で組んだ仮の橋が作られるが、そうでない年は、ノーカーと呼ばれる小舟の渡しができた。7月から11月の約5カ月間は、ボロ・バンガによって道は遮断される。ベンガリと呼ばれる改良3輪自転車リキシャ（写真⑦）を竹の橋や、ノーカーによって雨季にボロ・バンガを渡すこともあったが、やはり、その数は圧倒的に少なかった。ボロ・バンガは洪水の流路でもあり、D村のなかでも低地に位置している。湛水がなければ、ボロ・バンガの底から道まで約2メートルの高低差の上り下りをしなければならぬ。乾季といえども、荷物を積んだベンガリがボロ・バンガを通過することは、容易なことではなく、乾季稲作用の化学肥料の入った袋を乗せた



⑥雨季に入ったばかりのボロ・バンガ。洪水の排水路となるため、絶好の魚場となる（1987年7月初旬頃撮影）。



⑦荷物を運ぶベンガリ（1987年2月撮影）。

2～3台のベンガリが一緒になってボロ・バンガを通過するときに、ベンガリ引き（ベンガリ・ワラ）が互いのベンガリを押ししている光景を何度も見かけた。ハットや村への物の運搬には、致命的な存在であったボロ・バンガが通れるようになることは、村人皆の願いであった⁽²¹⁾。

村落委員であるマタボールたちは、コンクリートの橋が必要であるとプロジェクトに要請してきたが、70万タカ（1993年当時、約150万円）もの経費は、タンガイル・サイトの予算ではまかないきれなかった。代替案として、ボックス・カールバートと呼ばれる、大きめの四角いコンクリート製の土管も検討された。しかし、ボロ・バンガは雨季の小舟の通り道であることと、ボックス・カールバートでは、排水容量が小さすぎて、洪水には耐えることがで

きない。どうしてもコンクリートの橋が必要だという結論となった。プロジェクトの関係者も、村落委員会の意見も一致し、コンクリートの橋の設置を可能にする政府事業の誘致に向けて運動が開始された。

D村の村落委員会は、ユニオン評議会に対して、橋の建設の必要性を訴えた嘆願書を提出した。マタボールたちが村落委員会の名で発起人となった手紙である。それには、「この地域の代表として」という文章の下に数名のマタボールの署名がなされている。一般の村人100名以上の署名も嘆願書には添付されていた。今回の嘆願には嘆願書が用いられたが、村のインフラ整備事業の嘆願は、マタボールたちがユニオン評議会に直接出席して村の選挙区から選出された議員が口頭で意見陳述を述べるときにサポートするという方法がとられることが多い。嘆願書という形式をふむことで記録として残るようにするとともに、単なるマタボールたちの私的な要求ではなく、嘆願が村の公（おおやけ）の存在となることを願い、嘆願書という形式をとってもらった。

舗装された幹線道路から土の道を2.5キロメートル入るとボロ・バンガである。当初、ボロ・バンガの橋の建設計画は、CARE (Committee on American Relief of Every where) の事業で行う予定であった。CARE の事業では、コンクリート製の橋が設置される予定の地点と幹線道路を結ぶ道にバンガが1カ所もないことが条件であった。2.5キロメートルの土の道には小さなバンガが2カ所あった。バンガは洪水が流れる箇所ですぐ土でふさぐことはできず、リング・カールバートを設置しなければならなかった。そのために、プロジェクトでは1992年末から93年4月にかけてフィーダー・ロード整備事業を村落委員会に提案したのだった。プロジェクトからは二つのリング・カールバートを作るための、コンクリート製のリングとリングの設置のためのレンガ等の資材を提供した。村人からは道路の土を掘り下げたり、リング設置後の土盛り作業に、労働奉仕もしくはそれに代わる1日の労賃を寄付してもらうことにした。しかし、先にふれたように、この事業において、村人の労働奉仕を引き出すことはうまくいかなかった。断食月とも重なったことも一つの

原因ではあったが、基本的な原因は私たちの村落委員会への過大な期待があったことはすでに述べたとおりである。プロジェクトが土盛り労賃を一部負担し、なんとか二つのリング・カールバートを設置し、CAREの事業の要件を満たしたのであったが、結局、その年のCAREの事業の計画には採用されなかった。

新たに、地方政府・農村開発省の地方政府部局の土木事業部の行っていたタンガイル県インフラ整備事業計画での実現をめざした。なんとか橋の建設を実現するために、プロジェクトのバングラデシュ・カウンターパートであるプロジェクト・ダイレクターの個人的人間関係を頼りに、カウンターパートと私たち日本人専門家とが、何度もダッカに設けられていたタンガイル県インフラ整備事業計画事務所に足を運んだ。その努力が実って、ボロ・バンガにコンクリート製の橋が架けられることになった。1994/95年の乾季の終わりに基礎打ちの工事が始まり、プロジェクトの終了間近、95年12月の中旬に橋は完成した。

4. 道路と橋の経済効果試算

村の人々が、長年の悲願としていた雨季に冠水しない道路と橋の建設が具体的にどれほどの経済的なインパクトがあるのかを本節では考えてみる。そのために、隣村のモヘラ（以下、M村）とD村でのベンガリと呼ばれる荷物運搬用に荷台を改良された自転車力車の所有台数と、雨季と乾季におけるD村ハットへ買い物に来る人の数を、それぞれ比較し試算した。

M村は、ボロ・バンガをはさんでD村よりは幹線道路に近く、M村から幹線道路までには雨季に洪水によって道路が寸断されるバンガはない。雨季にも、M村からは労することなくベンガリを幹線道路まで運ぶことができる。橋の完成後にはD村と幹線道路のコミュニケーションがM村並みになれば、D村のベンガリの台数は増え、M村の保有台数に近くなると考えられた（表5参照）。橋の完成によりM村の台数となる11台のベンガリの増加を見込ん

で、橋の経済効果を計算したのが表6である。

表6から、D村での橋のインフラ整備への投資効果は高いと指摘できよう。仮に橋の耐用年数を30年と設定するならば、年の償却費は単純計算で2万5000タカとなる。この金額は一見高額に考えられるが、橋が11台のベンガリをD村に増加させることができたとすれば、年間13万2000~15万8400タカの収益が、ベンガリを運転する人々にもたらされることになる。ベンガリを運転する人々は、貧しい世帯の村人であることが多く、ベンガリ購入のために村で活動しているグラミン・バンクの融資が利用されることも珍しくない⁽²²⁾。バングラデシュの農村開発の文脈では、ベンガリを所有して自分でベンガリを引く人は、自ら事業を起こしていこうという意味で、小規模な企業家(Enter-prenure)と見なすことができる。ベンガリの台数の増加に予想されるように、道路などのインフラ整備事業は、間接的ではあるが貧しい人々

表5 M村とD村におけるベンガリの台数

M村	D村	D村における増加予想台数
18台	7台	11台

(出所) Kazuo Ando, Habibur Rahman and Muhmmad Salim, "Village Report of Dakshin Chamuria-The Use of Locally Existing Knowledge and Thought," Report of the Workshop on Rural Development Experiment Project 9th to 11th July 1995, edited by Md. Mazharul Islam etc. BARD & JICA, Bangladesh, 1995.

表6 ベンガリの増加による利益増と橋の経費 (単位: タカ)

1月のベンガリの稼ぎ	増加台数11台のベンガリの年間の稼ぎ	橋の経費	耐用年数30年間とした年間の償却費
1,000~ 1,200	132,000~ 158,400	750,000	25,000

(出所) Kazuo Ando, Habibur Rahman and Muhmmad Salim, "Village Report of Dakshin Chamuria-The Use of Locally Existing Knowledge and Thought," Report of the Workshop on Rural Development Experiment Project 9th to 11th July 1995, edited by Md. Mazharul Islam etc. BARD & JICA, Bangladesh, 1995.

の間に小規模な企業家精神を啓発するにちがいない。だからこそ、貧しい人々への融資事業は、インフラ整備事業と呼応して実施されなければならないのではなからうか。

ベンガリ引きの他にも、橋や集落道路の完成により、ハットで物を買う人々の数は確実に増加すると見込まれた。乾季には洪水による湛水もないので、道路や橋が未整備であったとしても、無湛水の水田の畦やバンガの底を歩いて人々は徒歩でハットに来ることができる。洪水により冠水しない道路や橋を整備することは、雨季にも乾季のコミュニケーションを確保する目的がある。道路や橋の整備により増加すると推定される、雨季のハットに集まる人々の数は、乾季のハットの状況を調査することで、おおよその見当がつけられる。D村周辺の人口の9割以上はムスリム（イスラム教徒）であり、年に2度あるムスリムの祭りのイードの直前のハットには、最も多くの人々が集まる。イード前のハットに集まった人々の数は、ハットの最大の潜在購買力

表7 D村定期市に集まる人々の数の季節変化

	道路・橋未整備 雨季 1994年8月17日	道路・橋整備 乾季 1995年1月7日	最大購買人数 イード祭りの直前 1995年2月26日
集まった人数	1,946人	2,941人	4,198人
集まった村数	32村	34村	43村
購買 推定人数	2,000人	3,000人	4,000人
最少 推定購買金額	10タカ	10タカ	10タカ
月間定期市開催回数	4回	4回	4回
月間最少 総売上げ金額	80,000タカ	120,000タカ	160,000タカ
季節（6カ月間）	480,000タカ	720,000タカ	960,000タカ

(出所) Kazuo Ando, Habibur Rahman and Muhmmad Salim, "Village Report of Dakshin Chamuria-The Use of Locally Existing Knowledge and Thought," Report of the Workshop on Rural Development Experiment Project 9th to 11th July 1995, edited by Md. Mazharul Islam etc. BARD & JICA, Bangladesh, 1995.

を示していると考えられる。以上の仮定をふまえ、雨季、乾季、イードの直前の三つの時期にハットに集まった人々の数を実際に調査し、道路と橋の整備が引き出すD村のハットの潜在購買力を量的に推定した数字が表7にまとめられている。

ハットには、小売りを専門として各ハットを回っている人、近隣の村から自分の家でとれた野菜や果物、あるいは魚をとるための手づくりの網などを持ってきて売り、帰りにはその金で買い物をしていく人々など、売り手は一樣ではないが、約200人の売り手がハットが開催される道路の両側とイード・ガ・マットに座る(写真5参照)。表7に示されたハットに集まった人々の人数には、この売り手も含まれている。調査方法は、ハットに入る手前の数箇所でプロジェクトのスタッフが入ってくる人を数えあげた。

購買力の推定について表7では、ハットでの1人の購買額を平均して1人10タカと見積もっている。個々には50タカ、100タカを超えることも珍しくないが、親子で来ていたり、売りに来て買わずに帰る小売り専門の売り手の数を考慮して、最少の金額を推定値とした。実際の金額はもう少し高いと考えられる。調査の結果、雨季の道路と橋の未整備によるハットでの損失は、最低でも年間24万タカに及んでいると見積もることができた(雨季約6カ月のロスである、72万タカから48万タカを差し引いた推定金額)。

橋の建設費に伴う年償却費2万5000万タカについては、橋の完成によって直接に利益の恩恵をこうむる人々から徴収するか、政府の補助により埋め合わせることを考えられる。直接利益を受ける人々をベンガリ引きとハットでの売り手とみなすと、218人(200人が売り手、18人がベンガリ引き)がその対象となる。ハットでは、場所代として数タカが徴収されることもあるが、D村のハットはいまだに(1997年3月現在でも)場所代は徴収されていない。しかし、売り手やベンガリ引きのハットの日の稼ぎは他の日より多く、50~100タカは確実であるといわれている。もっとも農村部で親しまれているビリ・タバコ1箱、紅茶1杯が約1タカであることから(95年5月当時)、1回のハットで1人から2タカの橋の建築費を徴収することは可能であろう。す

なわち、年間2万2672タカを集めることができる。残り3328タカが、政府の負担すべき金額で、私は、これくらいの金額は政府の直接的な補助があってもよいと考える。

D村周辺では、貧しい人たちの重要な雇用先であるビリ・タバコ製造、機械織りの仕事や、日雇い農夫の仕事は、雨という天候のために極端に減少する。雨季には、ハットでの小売りの仕事やベンガリ引きが重要な収入の糧となる。このようなバングラデシュの農村の状況下では、まさに、貧しい人々への融資事業と並んで、ハットの発展が貧困の撲滅への具体的な事業として優先されなければならないだろう。

5. 郵便貯蓄事業

村人の“企業家精神”が、ハットや道路、橋などのインフラ整備と、ベンガリなどを購入するためや、商いを始めるための資金により刺激されることは、誰もが認めることである。特にグラミン・バンクをはじめとする NGO や BRDB などの政府機関は、バングラデシュの村人の“企業家精神”に頼るように、年間数千タカの個人向け小規模融資事業を展開している。しかし、“企業家精神”が刺激され、だれもが資金を元手に、商業や生産活動を行うことができるようになるのであろうか。私はそうではないと思う。“企業家精神”に最も必要とされるのは、自立的な責任感であるように、私には思えてしかたがない。自らが行う商いや、物を生産して売るという行為には、損をするかもしれないというリスクが絶えずつきまとう。そのリスクを自分で背負っていく熱意が必要なのである。誰もが、このような熱意ある“企業家精神”をもっているわけではない。

D村では、当時(1995年)ハットや道路、橋などのインフラの未整備な条件があったとしても、グラミン・バンクや BRDB などから個人的な小規模融資を受けている村の全世帯の約3分の1のうち、少なくとも過半数の世帯では、他の人に又貸しすることで利鞘を稼いでいると村人は大まかに見積もっ

ていた。実は、小規模融資を受けていたD村の土地なし農民、貧農や小農の一部は、“小資本家”として、村の経済活動のなかでしっかり投資チャンスを選択していたのである。誰もが“企業家”に向いているわけではなく、“小資本家”として融資された資金の運用をはかることは、ある意味で健全な選択と、私の目には映る⁽²³⁾。

私が滞在したことがあるバングラデシュの他の村々での見聞によれば、貧農、小農が村のなかで経済的に這い上がっていくためには、息子を多く持ち、息子たちを日雇い農夫に出して小金をため、金を貸しつけることで土地の耕作権を借金の返済まで譲り受けるポンドックを行うことが確かな“裕福になる方法”であると言われている。ポンドックでは、土地の耕作権が利子として支払われるので、耕作地を持たない世帯でも、飯米を確保することが可能となる。この他にも、ポンドックは勿論であるが、土地なし世帯が現金を無担保で貸し付けるときには、マタボールを間に入れて証人を立てるなどの努力をして金を貸し、利子は粃米によって支払われる。このような事例をD村でもよく耳にした。また、地下水利用の灌漑ポンプを購入し、乾季の高収量品種稲作のための灌漑水を販売するという農家による個人事業がD村では盛んであるが、そのための資金繰りに、ポンプ主が借金をすることも珍しくない。灌漑を受けている耕地の水の料金は、その耕地で栽培されている乾季稲作の収穫量の4分の1である（粃もワラも刈取時に四つ稲の山を作り、一つがポンプ主に圃場から支払われる）。このことも手伝っているであろう。利子は粃で支払われることが普通に行われている。D村の私の知り合いの土地なし農民であるM氏は、自らは機織り職人であるが、妻が受けている数千タカのグラミンバンクからの融資を上手に他人に貸し付けることで、子供3人と妻の家族5人に必要とされる年間の飯米量を上回る年間数十マウンド（1マウンドは約37キログラム）の粃米を得ている⁽²⁴⁾。

以上からわかるように、バングラデシュの村人は小金をこつこつとため、貸し付けることに対する敏感な経済センスをもっている。これは、私がバングラデシュの村に生活することで得た実感である。貧しい人々が村の企業家

的な能力を発揮できる人々に投資するという資金の流れをもっと支援することが農村開発事業のなかでも求められているのではなからうか。貸付利子が年間120%である村人の貸付利子に比べれば、20%そこそこのグラミン・バンクや BRDB の貸付利子は低いと言えるが、私たち日本人の感覚からすれば、けっして馬鹿にならない金額である。特に、これらの融資に対する返済は、借りた翌週から週割りに試算された返済金が毎週取りたてられるのであるから、実際にこの資金を利用して事業を開始することは、相当の覚悟がいる。勢い、村では毎週の返済には夫が日雇い農夫、機織りなどで稼いでくる現金収入が目当てとされる。借りた金をあてにせず、人に貸し付けボーナス的に利子を稼ぐ。私には、グラミン・バンクや BRDB の小口の融資事業は毎週積み立てられる貯金の前倒しのように思える。1年間なんとか辛抱して貯金をすれば、1年で数千タカ（1500～2000タカから融資が始まる）貯めることができることを、融資を受けて又貸している人々は実証しているとも指摘できよう。

一方、先に述べたように、“企業家精神”が、発揮されるようになるためには、自立的な精神が育成されることが最も大切である。融資をするから、何かをきなさいという態度からは、成功するような“企業家”がどれほど生まれてくるか、疑問である。そのことが、又貸しの増加現象にも表れているのであろう。

ところでD村周辺には銀行がない。約4キロメートル離れたエレンガの町にあるのみで、村人はいわゆるタンス貯金で従来は小金を貯めてきた。泥棒の危険性も高く、私が実際に目にした例では、貧しい村人はマタボールにわざわざ貯めた小金を預けにくることもあった。グラミン・バンクや BRDB などの小口融資も見方を変えれば、マタボールのようなものであろう。しかし、いずれも本来は貸付けに対する返済であったり、個人的な信用による一時預かりである。ねじれた貯蓄行為とも言える。私たちは、なんとかしてこのねじれを本来の姿に戻し、小金を安全に貯めるという習慣を奨励できるような公的な「村の銀行」が必要であると考えた。村の銀行としての郵便局の

役割に注目したのである。つまり、村人の貯蓄習慣を促すことで、自分の金を貸す、自分の資金を元手として商売や事業を興していくという自立的な気運が村に芽生え活発な“企業家精神”が育つことを期待したのである。そのために村落委員会の力を借りて郵便局を誘致することにした。1994年3月20日に、プロジェクト関係者と村落委員や村のプロジェクト・スタッフの努力によって、村に郵便局を開設できた。以下に、村の郵便局を中心にどのような変化が起こりつつあるかを報告する。

D村の郵便局は、いわゆる簡易郵便局なので定期預金は扱えず、普通預金口座のみが開設できる。しかし、当初、村の郵便局における貯金口座開設はあまり一般の村人には好まれていないことが郵便局の職員などの話から推察された。そのもっともな理由は、預金の引出し手続きに時間がかかることで、一般の村人が厭になってしまうからだというのである。そこでD村では、この問題を解決するために、開設からしばらくの間はプロジェクトのスタッフが、村から選出された郵便局長、配達員（2名）の活動をしっかりと監督することにした。貯金口座を作るように配達員に各世帯を訪問してもらい、村人にも直接働きかけた。一方、村では、行政サービスが有効に村人へ届くために、農業改良普及員などの補助役人と村落委員会との連絡会議が月に1回開催されていたが、郵便局長にはその連絡会議に出席してもらい、郵便局の月々の業績を報告してもらった。そのために、3人に対して、合計で300タカの月々の手当てをプロジェクトから支給した。設備の点でも工夫した。他の村の郵便局は名ばかりの郵便局で、村の常設店の片隅を借りていたり、建物はあっても家具がほとんどなかったりしていた。そのためD村の郵便の開設にあたり、郵便局の建物の柱と土地を村から提供してもらい、プロジェクトからは屋根と壁用のトタン、金属性で鍵のついた扉式の棚、机、椅子、ベンチ、自転車を一式寄贈した。村の郵便局らしくしたのである。こうして、村落委員会の委員、つまり、マタボールたちや、一般の村人たちに、この事業を浸透させていく仕組みを作った。

以上のようなプロジェクトの関与があったとはいえ、周辺の数カ村の世帯

表 8 D村郵便局の貯金口座の実績 (1994年3月20日～95年5月)

(単位: タカ)

開設口座数 (口座)	1995年5月の		総預金額	総引出額	預金残額
	預金額	引出額			
385	36,145	16,295	289,249	122,360	166,889

(出所) Kazuo Ando, Habibur Rahman and Muhmmad Salim, "Village Report of Dakshin Chamuria-The Use of Locally Existing Knowledge and Thought," Report of the Workshop on Rural Development Experiment Project 9th to 11th July 1995, edited by Md. Mazharul Islam etc. BARD & JICA, Bangladesh, 1995.

を対象にして設置されたD村郵便局は、表8から理解されるように、十分にこの地域での銀行の役割を担っていると言える。貯蓄と引出金額が大きいのは、村での観察によれば、服を売り歩いている村の商人(これを服の商い人: カポーレル・ビャブシャイと呼ぶ)などの小さな企業家たちが、売上金の安全を得るために郵便局に預けにきたりしているからである。これら商いをする人ばかりか、NGOにとっても村に「銀行」がある利点は大きい。1995年5月の時点で、UGSTというNGO団体は、インフォーマルな貧しい女性たちのグループをD村やその周辺の村に組織していた。この団体は個人融資事業に村人たちの貯金を資金源として使うというユニークな活動を行っている。グループに自前で貯金させ、グループ・メンバーに対して、自分たちのグループの口座貯金からお金を貸し付けるという頼母子講的な活動を展開している。メンバーが女性たちであるということから、女性の村以外への自由な外出を表向きはよしとしないムスリムが多いこの地域では、4キロメートル離れたエレンガの「まち」の銀行に出かけるのは、女性にとって大仕事である。95年5月の時点で、UGSTは20のグループの預金口座をD村の郵便局に開設していた。この女性グループのメンバーは、毎週数タカのお金を貯金している。毎週の貯蓄の習慣は確実にグループのメンバーの無駄な支出を減らし、貯蓄習慣を高めている。郵便局があることで、このグループの貯金は安全に預けられ、グループの貯金活動に対して監査の役割が結果的に果たされてい

るのだろう。身近な郵便局だからこそ可能なのである。

距離的なことはもちろんであるが、村人、特に女性は社会風土も手伝い、「まち」の銀行に出かけることにはかなりの抵抗がある。「まち」の銀行では、見知らぬ銀行のスタッフが対応に出ることも多く、村人にとっては“役人”のように感じられるにちがいない。しかし村の郵便局の局員は村の知り合いであり、隣人関係のある人々が郵便局の職員で話したりすることに抵抗感が少ないという大きな利点がある。

バングラデシュ政府は、もっと村の郵便局の活用をはかる必要があるのではなかろうか。D村の実績が示しているように、“貯蓄銀行”としての潜在的な役割を果たせる可能性は非常に高く、村人の貯金を政府は有効に活用していくことが望まれる。政府が、税金と郵便貯金を連動し、農村開発のためのインフラ整備を行う資金を作っていくことは十分に可能である。それなくしては、資金的にもインフラ整備を全国の村で実施していくことは不可能であろう。余談ではあるが、この分野のノウ・ハウにおいて、郵政事業が発達している日本の経験が果たすべき役割はおおいにあるのではなかろうか。

バングラデシュの村人たちが自立的な発展をめざすためには、自分たちができることは自分たちで行い、助け合う、頼母子講的な貯蓄活動が村の郵便局の存在で活発になることが私には重要なポイントになるように思う⁽²⁵⁾。そして村の郵便局での貯金が、村に存在している“企業家”への資金融資、もしくは、新たな“企業家”を生む契機となれば、ハットや道路、橋などのインフラ整備同様、きわめて自立性が高く、持続的展開が可能な貧困撲滅のための具体的な農村開発事業の一つとなり得るだろう。バングラデシュにおいては、ハット、道路、橋などと同じく、村における社会・経済活動を支える基本的なインフラであるという視点から、村の郵便局がもっている可能性が再評価されることが期待される。

あとがき——変化した村の雰囲気——

バングラデシュの人々は依存的であり、自立をめざした自助努力を忘れてしまっている。バングラデシュでよく耳にする援助関係者の意見である。確かに、援助に深いかかわりをもっている政府の役人はそうであるかもしれない。しかし、村人と長年つきあってきた私は、異なったバングラデシュ人像を抱いている。その答えの一つが本報告である。タンガイル県のドキンチャムリア村やシャハデブプール・ユニオンでの私が参加した国際協力事業団の農村開発に関する研究協力プロジェクトによって、このことが多少なりとも実践的に証明できたことを私たちプロジェクト関係者は率直に喜んでいる。

自助努力へと村人のやる気を引き出し得たのは、いままで看過されてきたマタボールと呼ばれる村のリーダーたちの村社会におけるプラスの役割を積極的に引き出したことにあると私は思っている。そのためにプロジェクトでは村の組織や事業が企画された。そして、インフラ整備に村人の意識を集中させることにある程度成功することができたのである。

研究面では思わぬ副産物を得ることもできた。村のリーダーシップの性格が明確に見えてきたのである。とらえどころのないと表現されてきたバングラデシュの村社会を、「二つのモードのコミュニティ意識」と「借用する権威」という見方で村のリーダーシップを性格づけることで、多少はとらえやすくなった。農村開発の当事者となってフィールド・ワークを行った成果であろう。

本文のドッキン・チャムリア村の事例が示しているように、バングラデシュの農村では、いまだインフラ整備の効果は大きく、その効果は専門的な経済分析をまたなくても、常識的な算数の世界で推定することができる。村のリーダーたちや一般の村人がこの点については、最もよくわかっていると言えよう。しかし、プロジェクトのインフラ整備のなかでも、村の郵便局の預金口座の繁盛については、プロジェクト関係者や村のリーダーたちの誰もが、

正直なところ予想していなかった。村の経済が活発である証拠でもある。1997年10月、プロジェクトが終了して1年半以上も経過しているが、郵便局の預金口座は増えつづけ、現在では440になったと、最近、村から知らせがあった。NGOであるUGSTの頼母子講的融資事業もますます盛んである。ドッキン・チャムリア村の集落道路については、新たにユニオン評議会の道路建設予算によって、道幅の拡張工事が一部で行われた。ハットが開かれるハット・コラでは常設店が増え、97年1月頃から、毎朝、ドッキン・チャムリア村や隣村の数人の村人たちが、野菜や魚、調味料などの毎日の必需品を売るための朝市が開かれるようになった。村は目に見えて発展しつつある。

村のマタボールの1人は「インフラ整備の事業が、村の雰囲気まで変えた」「今では、誰もが発展ということを知っている」と表現してくれている。1年数カ月ぶりて村を訪問した私を喜ばせる意味もあったであろうが、インフラ整備事業が、村人の自立心を育てる契機となったことは確かなようだ。村の雰囲気は変えることができる。村の雰囲気が変わればそれにつられるように個人の気持ちも変わる。個人の発展がすべてであるという狭い農村開発の考えを超え、村全体を一つの対象として行われる農村開発事業がもっと模索されてもいいのではなからうか。D村を再訪してそう強く感じたのであった。

注(1) このプロジェクトは、次の四つの基本的な開発指針を掲げて始められた。

- ①村落の伝統的リーダーによって構成される村落開発委員会の結成とそれへの村人の組織化、②村落組織と地方行政（ユニオン、タナ）とのリンク、③在地の技術の適用による農民のニーズをとらえた複合的農業生産の増強、④土地なし農家や失業者問題の解決のための農外収入機会の創出。

詳しくは、以下の論文と報告書を参照。

海田能宏、サレハ・ベグム「バングラデシュ農村開発実験」（『東南アジア研究』33(1)、1995年）。

国際協力事業団研究協力「バングラデシュ農村開発実験」の以下の報告書、「最終セミナー報告書」（英文、1995年）、ならびに「最終報告書」（英文、

1996年)。

- (2) D村の試みが、バングラデシュの農村開発の手法において、どのような位置づけにあるか、また、事業の詳しい内容について、すでに発表した次の拙稿を参照。

安藤和雄, 内田晴夫, ハビブール・ラーマン, アルタフ・ホセイン「マタボールたちと在地の農村開発——バングラデシュ, ドッキンチャムリア村におけるアクション・リサーチの記録——」(『東南アジア研究』33(1), 1995年) 39~65ページ。

安藤和雄「バングラデシュの農村開発の現状と援助」(河合明宣編『発展途上国産業開発論』放送教育振興会, 1995年) 172~186ページ。

安藤和雄「バングラデシュの村人とともに」(山田勇編『フィールドワーク最前線』弘文堂, 1996年) 129~151ページ。

安藤和雄「農村開発におけるガバナンス——バングラデシュ農村開発実験——」(『アジア研ワールド・トレンド』第22号, アジア経済研究所, 1997年) 8~11ページ。

また、研究手法という視点からみれば、私たちの方法は、参加型アクション・リサーチである。D村の住民でもあった、プロジェクトの村スタッフたちと村のリーダーたちを、私は「研究者」とであると認めている。特に、このプロジェクトに先行した1986~89年にかけて、D村では「農業および農村開発に関する基礎調査」が国際協力事業団の研究協力プロジェクトの一環として実施された。D村の村スタッフたちは、その期間に、調査補助員として、私と一緒に調査しながら、調査方法、調査結果のまとめ方を学んでもらっていた。「農村開発実験」では、すでにスタッフたちは実力をつけていた。村人とともに諸事業の具体的な計画の立案と、事業のモニター調査計画をD村農村開発実験計画書としてまとめあげるばかりでなく、計画を率先して実行した。日本人を含めた村外からのプロジェクト関係者は、村に設けられたプロジェクトに泊まり込み、実際の事業の運営に参加したが、あくまで主役は、スタッフと村のリーダーたちであった。日本人参加者が、多少なりともベンガル語を使用できたので、D村においては、すべてベンガル語によって仕事が進められたこともこれに幸いした。英語の報告書は、他の四つのプロジェクト・サイトを含めたプロジェクト全体のワークショップ(1993年と95年の2回開催)での発表への報告に用いられたのみである。

私たちが村に住んでいたことが示しているように、D村では、参加型アクション・リサーチでよく用いられるような、指導チームという方法はとられていない。あくまで当事者として、農村開発の事業が展開されている村の現場で考え、議論することがD村のプロジェクトに参加していることであるという基本姿勢がプロジェクト期間を通じて貫かれた。このように、D村の研

究手法は、当事者意識を重視したフィールド・ワークであるとも言える。この点については、安藤「バングラデシュの村人と……」にも論じた。

なお、アクション・リサーチについては、次の論文が参考になる。

清田明宏「参加型アクション・リサーチと社会の固有要因」(佐藤寛編『援助と社会の固有要因』アジア経済研究所, 1995年)。

- (3) 在地性をいかに「開発」にいかすか。その考えの道筋について、協同組合を例に、京都生活協同組合の「くらしと協同の研究所」が主催した連続講座「アジアの地域社会と協同組合」の第2回「農村の社会発展と協同組合——バングラデシュの事例から——」で論じた。詳しくは、講演記録である次の拙稿を参照。

安藤和雄「農村の社会発展と協同組合——バングラデシュの事例から——」(川口清史編『協同組合 原点からの再生』くらしと協同の研究所, 1998年発行予定)。

- (4) インフラ整備の事例の一部については、安藤、内田他「マタボールたちと……」、安藤「バングラデシュの村人と……」に発表した。また、本稿は、すでに発表されたワークショップでのD村に関する次の報告書の一部を大幅に加筆・修正したものである。

Kazuo Ando, Habibur Rahman and Muhmmad Salim, "Village Report of Dakshin Chamuria-The Use of Locally Existing Knowledge and Thought," Report of the Workshop on Rural Development Experiment Project 9th to 11th July 1995, edited by Md. Mazharul Islam etc. BARD & JICA, Bangladesh, 1995.

したがって、プロジェクトはすでに終了しているが、アッケル・アリ氏をはじめとするD村のスタッフ、国際協力事業団の専門家として派遣された、D村の同僚である内田晴夫(四国農業試験場)、藤田幸一(東京大学大学院農学研究科)、吉野馨子(農村生活総合研究センター)、ならびに国際協力事業団研究協力プロジェクト「バングラデシュ農村開発実験」の日本人チーム代表者であった海田能宏(京都大学東南アジア研究センター)の各氏をはじめとする日本人プロジェクト関係者、ならびにD村での直接のカウンターパートであったバングラデシュ農科大学のムハッモド・セレイム、ハビブール・ラーマン、アルタッフ・ホセインの各氏をはじめとするバングラデシュのプロジェクト関係者、国際協力事業団関係者、D村をはじめとするプロジェクトの活動地域となった村々の人々、これらの方々に感謝の意を表するだけである。

- (5) D村については、グラムをドッキン・チャムリアの一つとする場合と、ドッキン・パラをマンドリア・グラムと呼び、他の三つのパラをチャムリア・グラムと呼んで二つのグラムと区別する場合がある。村人の会話のなかでは、

マンドリアとチャムリアに区別することが多いが、プロジェクトとの関係において、村のリーダーたちは、四つのパラが一つのドッキンチャムリア・グラムを作っているという立場をとり、村落組織や事業の活動を開始した。したがって、プロジェクトとしては、ドッキンチャムリア・グラムという立場をとった。村落組織については、詳しくは、安藤、内田他「マタボールたちと……」および以下の拙稿を参照。

河合明宣、安藤和雄「ベンガルデルタの村落形式についての覚え書き」(『東南アジア研究』28(3)、1990年)92~106ページ。

- (6) 村落委員会の構成メンバーや、組織の仕方などについては、安藤、内田他「マタボールたちと……」を参照。
- (7) D村の連絡会議については、安藤、内田他「マタボールたちと……」を参照のこと。
- (8) パラ・ミーティングがいかにして始まったかについては、安藤「バングラデシュの村人と……」に詳しく報告した。
- (9) ユニオン評議会で行われた行政との連絡会議については、安藤「農村開発に……」に報告した。
- (10) ユニオン税の滞納や税の徴収の問題点については、以下の論文にも触れられている。

Shirin Hussain, Abdul Quader and Abdul Karim, *The Union Parishad: A Study on Its Role in Development Administration*, BARD, Comilla, Bangladesh, 1996, p. 29.

- (11) ユニオンの土木事業インフラ整備事業の財源や内容については、以下の論文に詳しい。

矢嶋吉司「バングラデシュ——農村におけるユニオン評議会の機能と仕事ぶり——」(『アジア経済』第35巻第12号 1994年12月)。

藤田幸一「村落公共機能の強化をめざして——バングラデシュ農村開発の新戦略——」(『東南アジア研究』33(1)、1995年)。

- (12) D村ではリーダーたちは、ユニオン評議会議員に対し、毎年、竹の橋の予算1000タカを請求していた(安藤、内田他「マタボールたちと……」参照)。

Sユニオンでの見聞によれば、このユニオンの自主財源の使途については、会計年度(7月から翌年6月)ごとに予算案をユニオン評議会が作成し、県に承認を受ける。県は会計検査を行うことで予算の執行をチェックしている。例えば、1995年6月15日付で提出されたSユニオンの95年度の自主財源の40万9947タカの予算表は付表1のとおりである。予算財源の主なもの、各世帯の所有土地の規模に応じてかけられるユニオン・タックスと、一つのユニオンに数人(Sユニオンでは3人)雇われているVillage Policeと英訳される人々にかかるチョキダール・コールと呼ばれる税、バザールなどの定期市

の商人から徴収される使用料などである。一方、支出はユニオン評議会の議長、議員の手当て、書記、チョコダール、ドハダールなどのスタッフたちの給与（ほぼ半分は国から補填される）と、竹の橋の設置費、未納のユニオン税の回収手数料として見込まれている。未納のユニオン税がいかに大きな額となっているかがわかる。

- (13) D村では1993年1月～3月にかけての、洪水排水用のリング・カールバートを道路に設置する労働奉仕がうまくいかなかった理由の一つは、道路がユニオン管轄であったことで、住民たちは当然のこと、雇用対策として事業が行われるべきと錯覚していた。導入されて約30年になる FFW 事業が作った文化である（安藤、内田他「マタボールたちと……」参照）。FFW 事業は、

付表1 Sユニオン1995年度予算表（1995年6月15日作成）

（単位：タカ）

取 入		支 出	
土地、家屋にかかるユニオン・タックス	125,100	議長の手当て（1人）	8,400
村警察(チョコダールなど)コール(税)	47,400	議員の手当て（12人）	28,800
バザールなどの定期市使用料	20,000	書記の給与と手当て（1人）	19,800
未納のユニオン・タックス	202,128	チョコダールなどへの給与	47,400
グラミン・バンクへの借家収入*	6,000	RMP 事業への補填	15,300
牛・山羊などの作物害への罰金(コアール)	1,000	竹の橋の設置費	26,600
婚姻証明などの印紙代	1,319	お茶代	7,000
雑 費	1,000	議長からの借金への返済	4,000
前からの繰越し	5,000	今年度タックス集金代	25,000
		未納タックスの集金代	30,319
		旅費・日当	15,000
		議長、議員、書記、チョコダールなどへの未払いの給与と手当て	160,328
		スポーツ大会などへの寄付	1,000
		教育関係	1,000
		治療費	1,000
		文化関係(ドル・モハロッド)	1,000
		貧しい人への寄付基金	1,000
		光熱費(ランプの油代)	1,000
		雑 費	1,000
		繰越し(クロズィング・バランス)	4,000

(注) *グラミン・バンクはユニオン評議会の所有する建物を事務所として借りている。

(出所) Sユニオン評議会の1996年度予算書。

東パキスタン時代のアユブ・カーン大統領時代に導入された基本的民主主義 (Basic Democracies) 制度の一環として行われた Works Program が始まりで、貧農の救済対策が表向きの目的であったが、時の政府の政権基盤の安定を確保することに政府の意図があったことが知られている。詳しくは以下の論文を参照。

Rounaq Jahan, *PAKISTAN: Failure in National Integration*, The University Press, Dhaka, 1994, pp. 109-142.

- (14) すでに13年間の長期間にわたり、CARE (Committee on American Relief of Everywhere) は、未亡人等の極貧女性世帯主である女性をユニオン評議会管轄の土の道路の土盛り修理に雇用する事業である RMP (Rural Maintenance Programme) をユニオン評議会を中心に実施している。このプログラムの目的は、極貧女性世帯の経済的自立への援助と、土の農村道路であるインフラの維持にある。女性に支払われる日当34タカの一部6タカはユニオン評議会の指導により、女性たちの経済的自立のための活動資金として貯金される。このような事業もユニオンでは展開可能であり、世論からも高く評価されている (M. R. Rousseau, "RMP: A Success Story," *Observer Magazine*, The Bangladesh Observer, Dhaka, March 21, 1997)。ユニオンを対象にし、ユニオン評議会が役割の一端をになっているからこそ、このようなきめの細かい運営ができています。この事例が示しているように、私たちプロジェクトの事業である1件3万タカの小規模な補助に対し、ユニオン税の一部を加え、住民からの労働奉仕や寄付を引き出すという、手のかかるインフラ整備事業の運営は、ユニオンだからこそできるのもとも言えよう。
- (15) ほとんどの住民が東パキスタン時代に隣村であるドッキン・チャムリア村から移り住んだ人々であるバニアフォイル村シャハ・パラは、住民のまとまりが強い、特殊事情のバラである。
- (16) 河合、安藤「ベンガルデルタの……」を参照。
- (17) 例えば、1994年末の乾季稲作の開始時期に化学肥料が市場から不足し、政府は化学肥料をユニオン評議会を通じて村々に配給した。その時、D村ではグラム・マタボールたちが配給を指示していた。このように、もしプログラムが、その性質上ユニオン評議会議員の個人的なネットワークに閉じ込めておくことが不可能な場合には、ユニオン評議会の議員は、たいてい、議員の側からグラム・マタボールに近づいてくる。
- (18) Village Court は、まさにインフォーマルにマタボールの存在を「村のおおやけ」と認めたとこに成立していると言える。ユニオンの Village Court については、以下の論文を参照。

矢嶋吉司『バングラデシュ農村開発研究——地方行政区ユニオンの構造と機能——』(京都大学大学院農学研究科提出修士論文) 1993年, 84~87ページ

ジ。

- (19) 日本の都市と農村の関係の比較視点より、D村のハットの様子と特徴について、以下の報告書に記述した。

農耕文化研究振興会『『地域』・『縁』が拓く『都市と農村の関係』』（『京都府委託調査報告書平成5年度都市と農村の共生関係確立調査』農耕文化研究振興会、1994年）18～40ページ。

- (20) 村落委員会は1万2300タカの経費で1997年1月に店舗の床をコンクリートにした。97年1月までには6500タカの家賃収入があったが、これをすべてコンクリート床に使い、残りは月々の家賃収入から現在支払い中。貸店舗事業への総投資額は、10 decの土地代1万タカ、建設費8万6000タカ、床コンクリート代1万2300タカの合計で、10万8300タカとなり、単純に考えても、経費回収のためには128カ月、約11年の年月を要する。利益を考えれば、けっして効率のよい事業ではないが、決まった額の収入が入り、村落委員会委員の皆によく理解されるという利点が貸店舗事業にある。収支がガラス張りであることが不正を起こしにくく、村の公共事業経費の捻出と村落委員会の持

付表2 ハット整備事業の資金源とその用途（1996年1月現在）

（単位：タカ）

収 入		支 出	
プロジェクトからの直接的補助	96,000	土盛り経費	10,000
村落委員会からの補助	60,200	村落委員会貸店舗建設費	86,000
（内訳）		土地の購入費(登記代を含む)	77,200
プロジェクトから寄付を受け 耕運機の売却	(23,000)		
耕運機の貸出事業による収入	(12,000)		
プロジェクト事務所の家賃 収入(700タカ/月×36月)	(25,200)		
D村村人からの寄付	5,000	国会議員の政治資金として 寄付	3,000
国会議員からの寄付	3,000	土盛り経費	51,000
タナ開発委員会から国会議員 を経由した雨季特別プロジ ェクトの小麦3トンを現金化	24,000		
国会議員の乾季特別プロジ ェクトの小麦7トンを現金化	42,000	国会議員の乾季特別プロジ ェクトの委員会委員長経費	2,000
		ハット委員会の諸経費	1,000
合 計	230,200		230,200

（出所）筆者の調査による。

付表3 ハット整備事業での土地の購入内訳

ハット委員会名義	22 dec (1 dec=1/100エーカー, 1 エーカーは約40 a)
D村村落委員会名義	10 dec
村の郵便局名義	1 dec

(出所) 筆者の調査による。

貸店舗事業について、貸出しは、1996年6月から徐々に貸出しが始まり97年3月現在の家賃は下記のとおり。

付表4 貸店舗事業の月ぎめ家賃収入額

四つの部屋	450タカ/月
一つの部屋	400タカ/月
合計家賃収入	850タカ/月

続的活動を支えやすいと考えられた。

- 21) D村周辺では、私が初めてこの村を訪れた1986年までは、屋敷地とハット周辺を除き、すべての道は雨季に冠水していた。このことが示すように、この辺りではノーカという小舟が、雨季には物や人の重要な運搬手段であったが、雨季の始まりと終わり、洪水の湛水深が中途半端なときは、小舟は自由に往来ができず、徒歩とならざるをえなかった。また、伝統的に小舟を使っていたことと、本文でも述べられているように、ハロットと呼ばれる、土を盛っていない道があるのであるが、ほとんどが畦を残し耕地と化していたので、たとえ牛車があったとしても通る道がなかったのである。小舟に比べ、ベンガリは、運搬の自由さと移動の速さ（ベンガリは自転車の速さ、小舟は人の歩く速さ）の魅力がある。
- 22) 1997年3月23日現在、幹線道路へ出るためにはボロ・バンガを通らなければならないD村の北、東、中におけるベンガリの保有台数は12台で、そのうち1台が97年に借りたベンガリであり、4台が97年に、3台が96年に、95年と94年には2台ずつ、それぞれ購入されている。橋の完成後、いまのところは4台の増加があったのみである。しかし、95年5月の調査時には7台であったものが、97年3月の調査では96年以前のベンガリの購入は4台であり、単純に考えても3台が転売されたことになる。つまり、3台のベンガリ引きが商売を変えたと考えられる。インフラが整備され、条件がよくなったにもかかわらず、ベンガリ引きをやめた。いかなる問題があるのか、今後の課題

としたい。

なお、D村でのグラミン・バンクをはじめとするNGOの活動については次の拙稿を参照。

安藤和雄「NGOの発展を支える在地性（バングラデシュ）」（齊藤千宏編『NGOがかえる南アジア』コモンズ，1998年4月）。

- (23) なお、小規模融資と農村開発については、本書「第10章 農村開発におけるマイクロクレジットと小規模インフラ整備」（藤田幸一），を参照。
- (24) 1994/95年の乾季稲作でポンプ主は、1000タカを借りた場合、2md（約74キログラム）の粳米を利子として収穫後に支払っていた。なお、95年11月の時点で、改良品種BR-11の粳米の価格は1mdが270タカであった。
- (25) バングラデシュの農村開発における頼母子講的な組合ないしグループ活動がもっている可能性は大きい。停滞ぎみの政府系（BRDB）協同組合の再生も、頼母子講的な信用事業の導入で実現できるという考えを私は抱いている。詳しくは次の拙稿を参照。

矢嶋吉司，河合明宣，安藤和雄「バングラデシュにおける政府系協同組合の再生——A村の貯蓄・貸付組合の経験から——」（『農林業問題研究』第127号，第33巻第2号，1997年9月）。